

書評編集委員会

1984.9.17
第71号

書評



◆書 評◆

フォルスター研究会「ゲオルク・フォルスター作品集
—世界革命からフランス革命へ」(三修社)について

芳原政弘 4

◆書 評◆

僧院と監獄との間に

—「監獄の誕生」に関する試論—

田中寛一 19

回 図 書 館 問 題 回

なぜ図書館ネットワークなのか？

書評編集委員会 28

学術情報システムを粉碎するために

胸永ヒトシ 28

題 字 ● 網千善教 (文学部教授)
カット ● 「世界版画美術全集 ムンク/ロートレック」(講談社)
「世界の素描 クレー」(講談社)
「全国水平社六十年史」(解放出版社)
「長江一岩合徳光写真集」(三省堂)
表紙・「イギリスの公共図書館」(東京大学出版会)

大学図書館の「解放」序論の序論

木村隆美 34

● 連載

聞き書き―部落に生きる人たち⑤
学校で差別を体験した

田宮 武 42

研究余滴―ボードレール11

ボードレールにおける水(その二)

山村嘉己 67

日本中国ことばの来往ゆきまきその18

芝田 稔 74

'84.9 羅針盤



「このごろねえ、テレビでニュースを見てみると、いつもきまって、背景にアドルフ・ヒトラーが見えるんだよ。これはどういうことなのか、教えてくれよ。だつてきみは学問をやったんだから、説明できるはずだぜ。」

（西独過激派通信——田畑書店刊より）

これは友人カイと私の最後の会話だ。最後までいっても決して彼は死んだのではない。私が訪問を避けつづけているから。カイはもう丸八年——いや十年になるかもしれない——西独の癲狂院・閉鎖病棟の一室で人間らしい条件のもと、十分すぎるほどの精神病の薬をつめこまれ「患者財」の一部となって保存されている。

カイのような立場にある人を通常私たちは「友人」とは扱わない。その問いかけをまじめに受け応える相手とは考えない。彼はなにしろ「患者財」なのだから。

平和で豊かで愛に満ちたこの世界は、一步裏にまわれれば、腐敗と欺瞞と強搾取が支えている。私たちは皆そのことを知っている。だが私たちは知らぬふりをして日々をやり過ごす。カイたちは、ただ私たちより正直にその現実に触れただけなのかもしれない。

西独で観えたA・ヒトラーは、日本では、天皇ヒロヒトに重なっているというのに。

Xデー。「昭和」の時代を支えた天皇ヒロヒトの没後か

ら「皇太子」の即位、「元号改正」に至るまでの一連の極めて政治的色合いを強くもつ式典を、私たちはそう呼んでいる。

戦前は天皇の権威を最先頭に押し出し、「天皇の赤子」として、日本民衆のみならず、中国・朝鮮人民までをも帝國主義侵略戦争へと狩り出した、天皇ヒロヒト。

戦後、「象徴」の名のもとすべての「戦争責任」は不問にされ、人間ヒロヒトとして、天皇一家は民衆各階層の生活の中に浸透し、陰に陽に国民の生活支柱として登場する。

オリンピック毎の「国旗掲揚」「君が代」斉唱を引き合いに出不すまでもなく、国際的イヴェント、国民的イヴェントの毎に天皇ヒロヒトをはじめその御一家はブラウ管のむこうに登場する。彼らが「皇居」を一步出るためにその周りには何千という警備員が配され、目的地域住民は徹底した監視下におかれる。「庶民」の娘・正田美智子と皇太子の「御成婚」を機に、女性週刊誌を筆頭にあらゆるマスコミが天皇ヒロヒト、及びその一家を扱う回数が増加した。が一方で、真正面から天皇制批判を試みんとする人々のことは決してマスコミの舞台には登場しない。「自主規制」、右翼の襲撃、公安の介入等々、様々な壁がはばむ。賛美はあるが批判の一切ない天皇の

登場、これを政治的といわずして何と言おう。

その天皇ヒロヒトの死期が近い。

Xデーとは、天皇ヒロヒトの死をもって昭和を美しく、総括し、次なる国民統合の象徴「皇太子」の即位、危機の時代の日本の新たなる「精神的支柱」をデッチ上げる一大イヴェントである。何週間、何ヵ月かにわたり、ブラウ管からは娯楽番組が姿を消す。代わりにすべてのマスコミはヒロヒトの死を悼み、人柄を賛美する。

この一大イヴェントにむけての政治的なプログラムは現在既に着々と準備されている。

中曽根直属の諮問機関として発足した臨時教育審議会は期限三年、当然Xデー後の国民統合イデオロギーを如何にして教育政策にもり込むかを審議することになる。

大学という「最高学府」に籍を置き、「学問している」とを立場に、社会との具体的な関わりを猶予されている(らしい)私たちは、何故「テレビニュースのむこうに、ヒトラー(天皇ヒロヒト)がみえる」のかを、柵のむこうにいる多くのカイ達に伝えることが出来るのだろうか？ 私たちはこの問いに答えられなければ、友人としてのカイすらも失うことになりはしないか？

(Y)



一八世紀啓蒙思想の實踐に生きた探險家・思想家フォルスター

—フォルスター研究会「ゲオルク・フォルスター作品集—世界旅行からフランス革命へ」(三修社)について—

芳原 政弘

はじめに

私たち研究グループは、このたび一八世紀後半の激動のヨーロッパ史の渦中に、時代の先端を切つて生きたゲオルク・フォルスターというとてもユニークな人物について紹介する機会を得た。副題の示すように、かれは若い頃有名なイギリスの探險家クック船長に連れられ世界旅行を体験し、その見聞をまとめた『世界周航記』によつてドイツのみならず、ヨーロッパに名声を博した探險家・博物学者であり、かつ芸術・文学への深い理解と政治・社会に対する鋭い洞察をもつて浩瀚な著述活動を展

開したヒューマニズムの思想家、さらに一七八九年に勃発したフランス革命に強い共鳴を示し、革命の影響下に成立したドイツ最初の共和国「マインツ共和国」の代表として民主主義政体の樹立・維持に献身した革命的政治家でもある。

日本ではまだなじみがうすく、ごく一部の専門家の間でしか知られていないが、実はドイツでも生前の名声に引きかえ、晩年の革命家としての行動が誤解されてか、長い間忘れられ、いな黙殺された存在であった。しかし、第二次大戦後にわかに注目を集め、研究が進むにしたがつて次第に高い評価を受け、今日ではドイツ史やドイツ

文学史の一時期を代表する最重要人物の一人とみなされるようになった。以前の文学史では、わずかな例外を除き、まったく触れられないか、ほんの數行で片づけられていたのに、近刊の西独の標準的文学史（ドゥ、ボア／ネーヴァルト編『ドイツ文学史』第四卷第一部、一九八三年刊行）にも、東独の代表的文学史（ダーンケ編『ドイツ文学史』第七卷、一九七八年刊行）にも、かれについて特に項目を立て記述されている。後世に改めて存在意義を認められた希有な一例といえるだろう。なぜ今日再評価されるにいたったのか、訳者の一人としてここにかれの生涯と思想の一端を述べさせていただき、読書人みなさんのご関心を期待したいと思うのである。

探險家とつら

ゲオルク・フォルスター（一七五四年一月二九日—一七九四年一月一〇日）は年令からいえば、ドイツ古典主義の巨匠ゲーテとその一〇歳年少のシラーのちょうど中間にあたる。が、当時のドイツ知識人のなかでかれはまったく異色の存在といつてよい。出生地はドイツではなく、ポーランドのダンチヒ（グダニスク）近郊の小村ナッセンフーベン。父親ラインホルト（一七二九—一七九八）はドイツのハレで神学を学び、この村の牧師職に就いて

いたが、神学よりも自然諸科学、地理学、語学に関心をもち、後に一七カ国語に通じた博物学者で、かれは七人兄弟の長男である。

かれの経歴の特異さは何よりも三度の探險・調査旅行の体験にある。第一は少年時代のロシア旅行（一七六五—一七六六）。父がロシア政府よりボルガ川畔のドイツ人居地の現地調査を依頼されたとき、一〇歳半のかれも同伴する。ダンチヒからクライペダ、リガを経てペテルブルグ（レニングラード）へ行き、そこを基地にモスクワ、サランスク、サラトフを経てカミシンへ、そこでボルガ川を横断しドイツ人居留地へ、調査後さらに中央アジア平原を通過してエリトン湖までいたり、そこからペテルブルグに戻ったロシア南部の行程四〇〇〇キロに及ぶ一年半の旅であった。

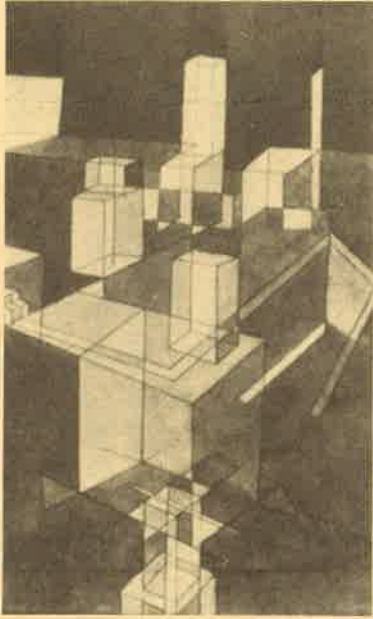
少年フォルスターは父を助け、行く先々で動・植・鉱物や地理、地質の調査研究に従事し、ことに新しいリンネの分類法による植物の観察・収集が得意だった。この探險によってかれに自然科学、文化人類学への強い関心が芽生えたといつてよい。ペテルブルグで父がボルガ居留民のための法規や報告書を作成中、かれは七カ月ほど学校に通った。これがかれの受けた唯一の正規の学校教育であり、もちろん大学に学んだことはない。かれの教

育はもつばら父の個人教授と旅行体験に基づき、いわば大自然がかれの学校であった。しかし一二歳のときにはすでにラテン語、ポーランド語を母国語のように話し、仏・露・独・英語を解し、ことに画才を發揮する。報告書が当局の封建的官僚政治を批判する内容だったため、父は期待した地位どころか一文の報酬も得られず、止むなく海路イギリスに渡った。この冷たい仕打ちは少年に強い正義感と封建的支配に対する厳しい批判を目覚せにちがいない。(後年父子の名声を知ったロシア政府は五〇〇ルーブルを支払った)

ナッセンフーベンの牧師職を他人に占められ、家族七人呼び寄せたイギリス(ロンドンとウォリントン)での生活は貧苦との闘いだつた。父は一時ウォリントンで教職を得たが、やがて失職、家庭教師と翻訳で生活を立てる。かれは家計を助けるため、ロンドンでは織物商人の丁稚として働き、ウォリントンでは全寮制学校のかれより年長の学生にフランス語を教えるかたわら、父に協力して仏・独の旅行記の翻訳に没頭する。三年余りの短期間に父子の訳業は印刷ページ一五五〇にのぼり、おそるべき語学力と労力を示している。ちなみにかれの最初の著述はロモノソフ著『ロシア小史』の英訳(八五頁)。権威あるロンドン・アカデミー協会の年鑑に「ロンドン・

アカデミー協会は、一七六七年五月二日フォルスター氏の息子で、まだ二三歳にも満たないが、いろんな言語を話す若者に対し本書の贈呈を感謝する」と記録されている。旅行記の翻訳は自然や地理に関する知識の習得と表現力の練磨に役立ったことだろう。イギリス・東インド会社から探険旅行の依頼を受け、再度ロンドンへ赴いたが、この計画が中止され、一家の生活は、苦しくなるばかりだつた。この苦境を救ったのがクック船長(一七二八―一七九)の第二次世界周航(一七七二―一七五)への誘いである。すでにロシアの博物・地理書によって博物学者として知られていた父だけでなく、かれも同伴が許されたのは動植物を上手に描くという画才が買われたからである。

かれの第二の旅行体験はしたがって壮大なスケールの世界旅行。かれは一七歳七カ月のときから三年間、今日の大学生にあたる時期に、クック船長指揮下全一六名の乗務員の一人として「レゾリューション号」(四六二ト)に乗船、世界最初の東回りによる地球約三周到相当の大航海を果した。特に父は航海日誌と動物観察の記録に、かれは植物の収集・整理と生物の写生(約六〇〇点の色彩画が現存し、すばらしい手腕を示す)に従事した。帰国後直ちに成果を公刊したが、その最大のものが



『世界周航記』二卷(英語版一七七七年、ラスベの協力による独訳一七七八・八〇年)である。これはもちろん父との共著だが、二二歳の青年のものでないという批判に対して「本著のどの行も私独自の限られた考えにしたがつて書かれたものである。私自身の文体と表現法はいささかも侵されていない」と答えている。これまで父の陰に隠れていたかれも、ここに著述家として頭角をあらわし、本著により一躍名声を博する。この旅行記は父の航海日誌をもとに綴ったものだが、無味乾燥な学術報告でも興味本位の旅行談でもなく、自然・風土・人間をリアリステイックな目で包括的に関連づけて観察し、ことに未開の島々の社会生活、風俗、習慣を先進のヨーロッパ

啓蒙思想の観点から捉えたところに特徴があり、現実の哲学的認識という新しい質の紀行文として高く評価されている。植民地における白人の原住民抑圧、奴隷売買、倫理に反する所有欲、悪らつさを激しく批判し、南洋のパラダイスの島でも、すでに上の者が下の者の犠牲で生活している有様をみて「一般民衆がゆくゆくこの抑圧を感じ、その原因に気づくなら、かれらは傷つけられた人権の感情に目覚め、革命を引き起こすだろう。どんな国家もこの循環を免れない」と述べ、すでに社会の基本法則を認識していることに注目される。

ドイツに渡る

帰国後、かれは幾多の榮譽(ベルリーン・自然研究友の会会員、マドリッド・王立薬学アカデミー会員、ロンドン・英国学士院会員)を受けたが、生活の方は依然として苦しかった。そこでまず『世界周航記』の仏版と南洋の収集品の売却で金を稼ぐために、パリへ出向く。前者は失敗したが、アメリカの政治家フランクリン(後にすぐれたエッセイを書く)やフランスの博物学者ビュフォン(後に名著『自然史』の独訳に従事)に会い、大きな影響を受ける。次に父の職探しにドイツへ向かう。デュッセルドルフでゲータの親友・哲学者ヤコービ宅に寄

宿して奔走の結果、幸いにもカッセルで薄給ながら自分の教職（博物学）を、父にはハレ大学に教職を得ることができ、父は生涯ここに留まった。二四歳ではじめて踏んだドイツだったが、かれの名前はすでに知れ渡り、旅行中いたるところで歓迎され、ゲッティンゲンでは一二名の有名教授がかれのため会を催し、ベルリンでは五〇以上の家庭から招待され、多くの知識人との交友も得た。尊敬するレッシングをブラウシユヴァイクにだずねたのもこのときである。（かれはすでにロンドン時代に在任のドイツ人を通じてドイツ文学・哲学書を知り、愛読していた）

カッセルでは博物学を講ずるかたわら、ロンドン以来の友人・物理学者リヒテンベルクと雑誌「ゲッティンゲン科学・文学マガジン」の発刊、古典文献者ハイネの主宰する雑誌「ゲッティンゲン学術報告」への寄稿（一七九二年までに地理書に関する書評一〇〇以上を書く）などドイツ語による著述活動に従事し、世界周航の成果だけでなく、世界観に関する評論に筆を染める。私生活では、ハイネの娘テレゼと婚約し、ゲータやワイマル公の訪問も受ける。

カッセルで四年を過ごした後、ポーランドのヴィルナ大学に招へいされるが、その間数ヶ月余暇を得て、ゲッ

ティンゲン・ライフチヒ・ドレスデン・フライブルグ・ブラハ・ウィーン・クラカウ・グロドノ・ワルシャワなどの諸都市を訪れる。ことに講義準備のためハルツ、テュービンゲン、ザクセン、ポーランドで熱心に鉱山の調査をおこなうとともに、各地の図書館・研究所・美術館・劇場に足繁く通った。

ヴィルナでは愛妻テレゼと新生活に入り（新婚旅行のとき、ワイマルを訪ね、ゲータ、ヘルダー、ヴィーラントに歓迎される）、娘テレゼ（後に文学史家ゲルヴィーヌスと父の全集を編む）を得、私生活では幸福だったが、研究施設の不備、学者との交流、新刊書の不足など貧しい学的環境のため満足のない活動ができず、三年足らずの滞在後、折からロシア政府より世界周航への参加を依頼されたのを機会に、ふたたびドイツ（ゲッティンゲン）へ戻る。しかしこの時期にかれの思考方法は確立されたといつてよい。（かれの多数の論文・エッセイに一貫しているのは、諸対象を事実在即してまず経験から把握し、これを別の事実と比較し、その相互連関のなから概念や法則性を導きだす、いわば「経験と比較の原理」である。これはドイツ観念論の事実・経験より概念・抽象を優先させる考え方と対立するものであり、それは、たとえば哲学者カントの人種論に対するかれの論駁

にもうかがわれる。かれはカントに深い敬意を払いながら、カントが白人と黒人を先天的、遺伝的に異なる人種として区別したのに対し、この区別を根拠づける資料が不十分であり、正しい事実認識に立っていないことを具体的に指摘し、カントの「あらかじめ求めるべきものがわかっている場合にのみ、必要なものを経験のなかに見出す」という命題は「諸対象に自分の色眼鏡を押しつける」幻想であり、その所論は空中楼阁にすぎないとし、人間は一つの種より由来すると主張するヘルダーに賛意を示し、ヘルダーの認識は「経験という正しく、しかも物質的な方法」、「われわれにとって唯一の可能な方法」であると友人に述べている。

ロシア・トルコ戦争勃発のため、世界周航の計画は無期延期となり、一年後かれはマインツの図書館に職を得る。かれはその愛すべき人柄から人気の的となり、かれの家は一種の社交場となった。ある訪問者は「私の最上の仲間らはフォルスターの家だ……毎晩のようにこの家庭を訪れているが、聡明で興味深い人たちが幾人も自由に出入りしている。……かれはクックと一緒に世界を周航した人で、このうえもなくやさしい感情とこのうえもなく誠実な人柄に、おそるべき量の歴史や政治上の知識を具えている。……みんな仕事を終えてから、七時頃、

英国風にサモワールを囲んで集まり、九時頃まで一緒にいる。……ほとんど毎日旅行中の学者が訪れ、このサークルを一層はなやかにする。……私はこれまでこんなにすぐれた学校に通ったことはない」と語っている。

革命、そして思想の実践へ

かれがマインツに居住して九ヵ月後の一七八九年七月一四日、近代史上の最大事件フランス革命が勃発した。その二週間後、かれは「それにしても哲学がこれまで頭脳に熟成させたものが、次に国家のなかで実現した有様をみるのは、すばらしいことです」と語り、八月五日の国民議会での一切の封建的特権の放棄声明について「八月五日のフランス国民議会はなんと立派なことか。世界にまだ前例のないものだと思う」と述べ、さらに同年一月に「フランスは……戦いそれ自体でなく、どんなふうに戦われるかが、興味ある眺めです。専制主義と民主主義のこの争いは、今までこれに類するものはありません。この砲弾の攻防は独特の種類のもので、築かれた理性の世紀という刻印を刻んでいきます」と語っている。これはフランス革命を成熟した哲蒙思想の現実化とみたもので、今日の歴史評価にも即応する、実面的確な判断であり、おそるべき炯眼を示すといつてよいだろう。（ち

なみにゲーテの革命に対する最初の反応は一七九〇年の詩集にあるが、一例をあげれば「およそ自由の使徒はいつも私の気に入らなかつた／最後に自分のがままを求めぬにすぎぬからだ／多数を解放しようと望むなら、あえて多数に奉仕せよ／それがいかにむずかしいか知りたければ、それを試してみるがよい」、「悲しいかなフランスの運命、身分の高い方は熟慮するがよい／しかし一層熟慮すべきは小市民だ／身分の高い方は滅んだ。しかし民衆を／民衆から守るのは誰か／かの地では民衆が民衆の暴君となつた」という嘲笑的かつ拒否的なものである。イタリア旅行から帰り古典的調和の心境にあつたゲーテにとって革命ははじめ喧騒と混乱として受けとられたのである。

この西ヨーロッパが動揺しはじめた一七九〇年三月末かれはヨットに乗りライン下流の諸都市、ベルギー、オランダ、さらにイギリス、フランスへ旅立つ。これがかれの三度目の調査活動で、三カ月半の短いものだったが、以前のとは異なりかれ独自のプランにしたがひ、革命の影響を観察するのが目的の一つだった。三六歳のかれはこのとき二一歳の若いアレクサンダー・フンボルト（一七六九—一八五九）を同伴した。（フンボルトは、偉大な言語学者のヤーコブ・グリムが「ゲーテと肩を並べら

れるのはただ一人、フンボルトだろう」といい、ゲーテが「アカデミーそのもの」と名づけ、パリ科学アカデミーが「今世紀最大の学者」、「新しいアリストテレス」と追悼し、フンボルトとともに近代地理学の祖とされるカール・リッターが「第二のクロンプス」と呼んだ大探険家・学者である。そのフンボルトはフォルスターを、「比較民族・地誌学を目的とする學術探險の新時代」の開拓者、「私はかれの名を最も深い感謝の念なくして呼ぶことのできぬ、有名な先生であり友人」であると述べている）

この旅行の収穫は『ニーダーライン観察考』（二巻、一七九一—九二）にまとめられた。この旅行記は書簡形式でエッセイ風に、かれの訪問した各地方の風土、都市、人間の特性とその経済的・政治的・文化的状況を考察したもので、ことに造形芸術に関する描出は生彩を放ち、また革命の影響の目撃者としての観察は一七九〇年頃の西ヨーロッパの時代史的状況を伝える歴史的ドキュメントとみなされている。カッセル時代以降ドイツの学界・思想界のなかで活発な執筆活動に従事してきたかれは、それまでの体験・思想をここに結実させたといつてよく、本書はかれの最も重要な名著となった。なお、この旅行の副産物としてロンドンですでにインド文化の研究がはじ

められ、古代インドの詩人カーリダーサの戯曲『シヤクンタラー姫』の英訳があるのを知ったかれは、これをおち早く独訳したが、この紹介はドイツにおけるインド文化およびサンスクリット研究の端緒を開いた注目すべき成果である。日本でフォルスターの名を知る人は、多くこのインド文化のドイツへの最初の紹介者ということであらう。

かれは帰国後も革命の経過に注目していたが、やがてこれを対岸の火事として傍観できぬ状況になる。一七九二年九月二〇日のヴァルミーの戦いで、反革命の精鋭プロシア軍は敗北（ちなみにゲーテはこの軍に加わり戦場において「きよう、この地から世界史の新しい時代がはじまる」という有名な言葉を吐いた）、一〇月三日にキュステイーヌ將軍指揮下の革命軍がマインツを占領。將軍の「抑圧されたドイツ国民への呼びかけ」により政治結社「自由と平等の友の会」が設立される。この事態に直面してかれはしばし静観後、一月五日これに入会。

「私たちの生きている時代は、世界史の決定的な一時期なのです。キリスト教の出現以来、これに比べられるものはありません」（一月二二日）という認識に立って、ここに探險家・自然科学者かつ人道主義的思想家フォルスターは革命家へ、自分の思想（理論）を实践へ移す政

治的アンガジューマンへの道を踏みだすことになる。一月一九日マインツ臨時行政委員会副代表となり、二月には妻子を転居させ、翌年一月クラブの会長、三月七日ライン・ドイツ国民会議副議長となり、二五日マインツのフランス併合決議をもってパリへ向かう。三〇日かれがフランス国民公会の壇上で演説し、マインツ共和国がフランスの一部と決議されたその日、反革命のプロシア軍はビンゲンからヴォルムスを制圧、四カ月後にはマインツもふたたび絶対主義の手におちる。かれの財産は押収され、同志は逮捕され、父からは非難され、友人との連絡もほとんど絶たれ、ついには自分の首に懸賞金



がかけられ、妻からは離婚（友人フーバーと結婚）を迫られ、かれは亡命者の孤独な運命を余儀なくされる。しかしかれの不屈の魂はいささかもひるむことなく、かれの筆はいよいよ冴え渡った。が、一七九三年一二月世界旅行のときかかった持病が悪化、そしておそらく肺炎を併発、失意のうちに遥かインドへの旅を夢みながら一七九四年一月一〇日パリで客死した。三九歳二ヵ月足らずの短い生涯であった。

生きた時代と思想

以上がかれの略歴である。かれの人生は旅行にはじまり旅行に終わる、まさに冒険と波乱の生涯であった。が、かれの旅は一介の漂泊者や気まぐれな冒険野郎の旅ではなく、学術探険という新しい時代の要請、フランス革命という世界史の一大転換期を背景とするものである。かれは偶然か必然かこの新時代の大きな潮流に投げこまれ、そのなかで懸命に生き、自分の体験から得られた思想と信念に身を賭した人物である。この意味においてかれはたえず時代と関わり、対決しつつ生きた時代の息子といえるだろう。そしてこの時代とはいうまでもなく一八世紀啓蒙主義の時代である。「啓蒙とは何か」、同時代の代表的哲学者カントは次のように説明している。「啓蒙と



は、人間が自分の責任である未成年の状態から脱出することである。未成年とは、他人の指導なしに自分の悟性を使用する能力のない状態のことであり、そのような未成年の状態が自分の責任であるというのは、その状態の原因が悟性の欠如にあるのではなく、他人の指導なしに悟性を使用する決意と勇氣が欠如しているという意味である。汝自身の悟性を使用する勇氣を持って！というのが啓蒙のスローガンである」。要するに啓蒙とは人間が非合理的な外的權威に頼ることなく、自分のうちに所有する悟性、理性にしたがって勇敢に生きること、人間悟性による自主自立の意味である。今日では「無知な者を啓発して教え導く」という教育的な意味合いに用いられているが、これは主客転倒であり、一八世紀の啓蒙とは、他人に教えをたれるという僭越な意味でなく、みずから悟性に立って無知蒙昧の状態から脱出するの義である。もう一つ例をあげよう。やはり同時代の劇作家レッシングは『賢者ナータン』のなかで、ユダヤ、イスラム、キリストの三つの既成宗教のうち、最も真実なのはどれかという難問を立て、「三つの指輪」の比喩話で次のように答えている。「昔、東方に一人の男が愛する御手から一個の指輪を授かった。この指輪には値踏みのできぬ宝石がついていて、それは色とりどりの美しい光を発す

るだけでなく、不思議な力を持っていた。この力を信じて指輪をはめると、神からも人間からも愛されるといのである。この指輪は代々家宝として、誕生の後先を問わず、一家の最愛の者に贈られ、贈られた者は指輪の力で家長になるよう定められていた。指輪は父子相伝され、とうとう三人の息子を持つ父親に伝えられた。父は三人とも同じように愛していたので、臨終が近づくと困りはて、本物と寸分ちがわぬ二個の指輪を作らせた。できあがった指輪は当の父親さえ見分けがつかぬ出来栄で、父はそれを三人の息子に与え死んだ。父の死後、案の定息子たちは自分の指輪こそ父から譲り受けた本物だと主張し、家長権の掌握を譲らない。いろいろ調べてみたがわからず、争いはついに法廷に持ち出された。裁判官はこれに対して次のような判決を下す。今と成つては父親をここに呼び出すこともできないし、本物の指輪が口を開くまでじつと待っていてもむだなことだ。だが、本物の指輪は神と人から愛されるという不思議な力を持っているというではないか。にせ物ならそんな力はないはずだ。ところでお前たち三人のうちで、ほかの二人から一番愛されているのは誰か。答えられぬところをみると、お前たちの指輪はいずれも自分にだけ働きかけ、外に向かつては働かないのか。それなら、三人ともにせ物



をつかまされたいかさま師というわけだ。けれども、お前たちは指輪が三つあるという今の事態をそのまま受けとり、めいめい父から授った自分の指輪を本物と信じ、指輪の真偽を争いあうよりも、自分の指輪に秘められた寶石の力を發揮するがよい。自分だけを愛するのではなく、無我の愛を求め、善行に励むがよい。そして寶石の力がお前たちの子孫の代に發揮されたなら、数千年後のその時に、私はふたたびお前たちをこの法廷に呼ぶとしよう。そのときに、私より賢明な裁判官が判決を下すだろう」という話である。いうまでもなく三個の指輪とは三つの宗教であり、これらの宗教はすでに歴史的所産として存

在する。したがって今さら存在の真偽を問い、相争うのはむだなことであり、お互いに寛容をもって認め合い、光の象徴でみごとに表現されているように、それぞれの指輪がただの石ころにすぎないか、色あざやかな光彩を放つ寶石か、真か偽かはひとえに指輪の持つ不思議な力を發揮させる人間の行為、実践によるといっているのである。

(フォルスターはこの戯曲の英訳を試みたこともある)

さて、カントとレッシングは一八世紀ドイツ啓蒙思想の代表者であるが、カントがここで悟性を使う勇氣を持つて呼びかけ、レッシングが宗教は宗派的エゴイズムを捨て、本来の使命を果たせと促したのは、その時代にその逆の状況、つまり悟性・理性に矛盾・対立するものや不寛容な宗教的權威が支配していたからにはかならない。この時代は周知のように封建的絶対主義の時代であり、したがってこの二人は人權を無視し正義に反する専制的諸制度や頑強な教会の思想的權威に對して、人間の自然的理性による自主自立と、人類を同胞とみ、人種・宗教の区別なくたがいに寛容の精神をもって世界市民としてともに幸福な世界を築こうと唱導したといえるだろう。人間それ自身への深い信頼と人類の進歩への限らない願いが、一八世紀ヨーロッパの啓蒙思想の中心理念である。そして「自由・平等・友愛」の原理を掲げたフランス革

命こそ、この啓蒙思想にもとづいて、旧制度を転覆させた市民革命であった。

ところが、同じ啓蒙思想に成熟しながら、ドイツでは政治的変革にまではいたらなかった。もちろんドイツの多くの詩人・哲学者は革命の初期の段階、少なくともフランス国王の処刑、ジャコバン派の恐怖政治までは強い同調を示した。クロツプシュトク、カント、ヴィーランド、ヘルダーの老壮大家、若きヘーゲル、ヘルダーリン、フィヒチなどは革命に共鳴、感激した人たちである。(ゲーテ、シラーは冷やかな態度を取った)しかし、後にヘーゲルが「この(革命)理論はドイツでは思想、精神、概念として、フランスでは現実のなかへ嵐のように突入した」と語り、マルクスが「ドイツ人は近代諸国民の発展にただ抽象的な思考活動によってのみ随伴し、現実的闘争に積極的に参加しなかった」と述べているように、「自由・平等・友愛」の原理と四海兄弟の世界市民の思想は、「フランスの実践」、「ドイツの理論」という形になった。つまり後進国ドイツでは、いわゆるドイツ観念論哲学、ワイマル古典主義文学の偉大な文化を築きながら、封建的支配体制はそのままの形で残されたわけである。

フォルスターを考える場合、この啓蒙主義の時代状況を

のなかでどんな考え方で生きたか、ことに革命に対してドイツ知識人一般とは異なり、たんなる理論にとどまらず、理論から実践へと困難な道へ踏みだしたのはなぜか、この点に焦点をおいて理解することが重要と思われる。今、かれの膨大な論述について触れる余裕がないので、かれの基本姿勢についてののみ、ごく簡単に触れておきたい。かれの顕著な特徴は世界周航をはじめとする豊富な旅行体験にあるが、この経歴から何よりもかれはコスモポリタンだといってよい。かれが革命に参画したとき、ある友人が「どうか善良なプロシア人であってくれ」と頼んだのに対して、「その願いは私の主義と私が多くのお客様で述べた自由への愛と相容れない要求であり……いつどこにいても私は、善良な市民であるよう努めた」と述べている。この「善良な市民」とはまさに「世界市民」を意味するといつてよい。しかもたんに思想上のものでなく、学術探険家としての偏見のない観察・学識・語学力(ラテン、ギリシア、仏、英、独、蘭、伊語を解し、スペイン、ポルトガル、スウェーデン語の基礎を学び、ポーランド、露語も少しわかると自己紹介文にある)を具有する体験者であるところに深い意味がある。生活体験の広さにおいて、故郷ケーニヒスベルクの狭い領域をでないカントやロンドン、パリを知らぬゲーテは雲泥の

差を認めぬわけにはいかないだろう。この幅広い体験は種々な地域の自然、人間、社会を包括的にかつ比較して眺める機会を与え、そこから諸対象の正しい把握は何よりも事実と経験にもとづくべきとする認識方法を得た。かれは初期啓蒙主義の悟性・理性中心の見方に対して、理論は必ずしも実際と一致せず、理論の先入観は事実認識の危険性を伴うとし、啓蒙の概念を一步進めて「啓蒙とは経験から経験へと無限に進むものである」と主張する。かれは、先の人種論で白人と黒人を異なる人種とみたカントに対して、両者ともに人類という一つの種からでた、悟性を具えた人間であり、事実に根拠に乏しい先入的偏見からいたずらに両者を区別することは哲学者の罪であるといひ、ヨーロッパよりも文化的発展に劣るアフリカの黒人を偏見をもって虐待するヨーロッパ人に対して「白人よ、汝は自分の力を弱者に濫用し、その弱者を汝の動物にまで蔑み、かれらの思考力の痕跡さえも根絶しようとしているのに何ら恥じることはないのではありませんか」と批判し、弱者に手を差しのべるこそ啓蒙主義の使命だと述べている。理論でなく現実認識に立つヒューマニズムの促進がかれの考える啓蒙主義だといえるだろう。

この広い視点は文化理解においても、「真理は貧しい

未開な民族であろうと、強大で開化された民族であろうとすべての民族の所有である」とみ、いち早くインド文化に注目し、「人間の心が感ずることのできるこの上もない優雅な感情が、ライン川、ティーバ川、イリズス川のほとりに住むわれわれ白人と同じように、ガンジス川畔に住む暗褐色の人々の間も表現された」ことに注目して、世界文学への関心を喚起した。かれはまた時代状況に目を向け、近代芸術の不毛と道義の退廃について「芸術と徳が生みだされる源泉は、一つの感情である。ところが、専制主義の冷気がこの感情を枯渇させた」とし、理論・知識偏重の教育について「教育者は全力をあげて教え子の独自の活動を抑制しようと努力している。……かれらは幼児のやわらかな脳をゆりかごの振動によつて麻痺させ、激しい機械的な衝撃に慣らせ、この衝撃よりもやわらかな振動には適応できなくするように、学童や若者をかれらの論理のブランコの上に腰かけさせ、このブランコでめまいをおこすまで回転させている」とし、さらに政治について、支配者を理性の法廷に立たせ、弁明をおこなわせてみれば、興味深い見物になるだろうと述べ、支配者は民衆を「永遠の子供たち」とみ、「敬虔で従順であるかぎり、ゆくゆくは幸福になれる」といひながら、結局自分の利益だけを考えていると、芸術、宗

教、教育、政治、社会全般について時代の硬直化に鋭くかつ適切な批判を試みている。かれの主張はすべて今日にも妥当する。

ワイマル古典主義の代表者シラーはフランス革命について「神聖な人権にみずからをすえ、政治的自由を獲得しようとするフランス国民の試みは、たんに同国民の無能と品性のなさを暴露し、この不幸な国民のみならず、ヨーロッパの大部分を、さらに全世紀を野蛮と奴隷状態へ突き戻してしまった。……いまだ人間的自由の多くを欠いている者は、市民的自由にまだ成熟していないのである」と述べ、人間的自由と政治的自由を区別し、前者に重点をおいている。これに対し、フォルスターは「人間に自由を与えること、あるいは与えたいと願うことももし人間が依然として野蛮のままであり、またそれによって人間の精神的完成の素質が一段と形成しやすくなるというのでなければ、愚かなことだろう。精神的完成こそ目標なのであり、そのためには政治的自由が望ましいのである。というのは、徳が一般的なものとなり得るのはただ自由な国家においてのみだということ、私は信じて疑わないからである」と述べている。つまり人間的自由と政治的自由とは不離一体だということである。これは後進国ドイツの枠内で考えた者と世界的視野に立つ者

との相違といえるだろう。さらにかれはフランス革命の背景には民衆の「世論」があると、今日よく用いられる言葉で説明し、革命を歴史的必然性と認識している。(ちなみにゲーテもフランスでの革命は必然の結果であるが、ドイツではその模倣だと述べている)すでに革命のはじめから鋭く覚めた洞察を持ち、その経過を眺めていたかれにとつて、革命への参画こそ自分の歴史的使命と信じて、勇ましく実践活動に身を投じたのである。ゲーテはフォルスターの死の報告を受けたとき、「あわれなフォルスターはかれの誤りを生命をもって贖わなくてはならなかった。私は心から気の毒に思う」と、ある書簡に述





べている。しかし果してかれの行為は誤りだったであろうか。そう言うゲートル自身、六〇年以上をかけた畢生の大作『ファウスト』のなかで、若い時代に「全人類が受けるべきものを、おれは内なる自我によって味わいつくしたい。おれの精神で、人類の達した最高最深のものを、つかみ、人間の幸福と嘆きのすべてをこの胸に受けとめ、こうしておれの自我を人類の自我にまで拡大し、そして人類そのものと運命を共にして、ついにはおれも砕けよう」とファウストにおそるべき課題を課し、最晩年にその回答として主人公の死の直前「私は自由な土地に自由な民とともに立ちたい」と最後の言葉を語らせている。この遺言こそ封建絶対主義に対する啓蒙主義思想の結実、フランス革命の理念でなくて何であろう。この人間的自由と市民的自由の確立、人間と社会の双方の解放こそフォルスターを政治的参画へ促した究極の信念といつてよい。フランス革命が今日の民主主義国家を生みだす契機となつた歴史的意義を考へるとき、フォルスターの思想と歩みは現代の諸状況を原点に帰つて考えさせ、われわれに多くの示唆を与えてくれるのである。

(よしはら まさひろ・文学部ドイツ文学科教員)



僧院と監獄との間に

『監獄の誕生』に関する試論

田中 寛 一

『監獄の誕生』が何よりもまず、フランス旧体制下の身体刑から近代の自由刑への移行の歴史であり、王権の誇示による報復としての祭式的懲罰から、身体の拘禁による矯正としての教育的処罰への変遷の史論であることは、歴然たる事実であるにちがいないが、この書物を繙くことの痛快さはその過程をなぞるだけに尽きないのであって、まずはこの『監獄の誕生』におけるフーコーの所説の射程範囲を確認しておく必要があるだろう。

永久の闘い

すなわちフーコーによるなら、建築空間および権力機

構としての現代の刑務所は、十九世紀初頭にベンサムが考案した「一望監視装置」にその原型を置いているが、これは身柄の確保のみを目的とした古来の牢獄の遺産では決してありえない、というのもそこでは、中央の尖塔からの恒常的な監視、円周状の独房への個人の配分、時間割に従った律動的な日課、細則への拘泥による行動の規制、規律を維持するための償罰、そして日々刻々と記録される個人調査、といった実に微細で微視的な、「身体についての政治的技術論」を通して、監禁権力が受刑者たる個人を規格化し、再教育するからである。

監視者から個人はもちろん可視的であっても、個人か

らは監視者が不可視性の中に隠れているという機構上、現代社会にその網の目を拡散させている「概念」としてのこの装置においては、権力が非個人化していくにつれて、権力の対象たる個人はいつそう個人化されていく傾向にあり、その匿名性のもとで巧妙に個人を把握し、執拗に個人を追求する規格化の権力の、この技術的な戦略からこそ、人間科学および人間中心主義が誕生したのであって、ここに権力と知との、相関的・連座的・競合的關係の最大を見て取ることができるとともに、眼に見えないがゆえに不在であり、不在であるがゆえに遍在的な、今日の多形的権力関係に対する、個人の直接的で「永続的な闘い」の起点を見出すことができるのである。子供から大人への、女性から男性への、非白人から白人への、病人から健康人への、同性愛者から異性愛者への、無法者から「有法者」への、それは闘いである。

ところで「一望監視装置」におけるこの管理技術は、すでに古典主義の時代から、フランス各地の学校・病院・軍隊・工場といったさまざまな閉鎖空間において錬成されてきた、個人の身体を標的として監視・配分・規制・処罰・測定することによって、個人を矯正・治療・訓練・有能化する、「規律・訓練」の政治的な攻囲技術を継承し、強化したものに他ならず、そのモデルは中世以来、



厳格な戒律と自己放棄の場所として存在し続けてきた、僧院もしくは修道院制度にもとめられるものである。したがって「さぞ厄介なこつたらうな、死ぬまで毎日戦うとすれば。なんだってやつらは兵隊なんかにするんだらう、ただでさえ必死に戦っているおれたちを？ 戦う相手はいくらもある、おふくろや女房、家主や職長、ポリ公、軍隊、政府」と、シリトーが「土曜の夜と日曜の朝」に書いていることをふまえれば、僧院と監獄との間に見出されるものとはまず、そのどちらにも似た多様な監禁的空間（学校・病院・軍隊・工場）における権力の操作技術であり、それに対する永久の闘いであると言えようか。

永遠の性

コレージュ・ド・フランスの教授に就任した際の開講講演（『言語表現の秩序』）においても、「政治」と「性」を以後の主題に含めることを表明していたように、右に述べた権力概念からすれば、刑罰制度における政治的言説も、性現象をめぐる医学的言説も、論究の対象としてはきわめて特権的な位置を占めていたにちがいない。フーコーがこの『監獄の誕生』を著述するにあたって措定したその権力論は、それに続く『性の歴史』第一巻たる『知への意志』の中でも、多少のずれを示しつつ、というよりはむしろ、いっそう精緻で洗練された様式をもって展開されており、これらの著作がきわめて密接な関係にあることがわかるのであるが、ことこの『監獄の誕生』に限って言えば、性の問題はほとんど取扱われてはならず、奇妙といってもよいほどの驚くべき希少性を呈しているのであつて、権力論との関連という点においては、監視装置としてのハリ土官学校に関する、「放蕩および同性愛を防止せよ、とは道徳上の要請である」という断片とそれに類する箇所他は、わずかに売春施設の統御についての言及をみるのみなのである。

無論、性的現象は監獄制度とはまったく異質の領域に属





する主題であり、これと同列に扱うべき素材であるはずもないが、「一望監視装置」をめぐる対談の中で、「ついでながら、性の概念は非常に重要であるようにお見受けします。あなたは軍人における監視についてそのことを記しておられましたし、先程労働者の家族のお話のところで、またこの問題に突き当たりました。これはたぶん基本的なことでしょう」という質問に対して、フーコーが「そのとおりです。監視、特に学校の監視というあのテーマにおいては、性の統御は建築技術の中に刻み込まれているように見えます。パリ士官学校の場合、同性愛と自慰に対する戦いは壁によって語られています」と答え

ていることからしても、監獄的な空間における徹視の権力の、監視と処罰の政治的攻囲の分析にあつて、その基本的対象のひとつである性の主題の希薄さは、いかにも意図的であり不当でさえあると言わなければなるまい。

ジュネが『薔薇の奇蹟』の中で、「それにしても修道院や僧院（囚徒たちは訛つて蜜蜂と呼んでいます）の運命もまたふしぎです。その多くがいまや刑務所に、とくに中央刑務所になりさがっているのですから。フォントブロー、クレルヴォー、ボワッシー、いずれも同じ運命です！……昔からこれらの場所には、単一な性の集団しか宿らせまいというのが、神の意志であつたようです」と語っているように、僧院と監獄との間に介在するものとは次に、単一の性というよりも、性の不在であるとは言えないだろうか。

永劫の焰

あるいはフーコーは監獄における性の問題を、『性の歴史』の続巻で検討する予定だつたのであろうか。というのも『知への意志』の中に、「多様な性現象——年令につれて現われるそれ（乳児あるいは子供の性現象）、（中略）空間に付きまとうそれ（家庭の、学校の、監獄の性現象）——すべては権力の的確な手続の相関物を形

組織部員募集!!



組織部員を募集しています

生協新聞・書評誌の編集発行、講演会・映画の開催など、文化・教育活動を自らの手で作り上げてみませんか。

●連絡先 生協本館3F・組織部内

☎38719998 (直通)

☎38811121 (内線4821)

成している」という一節が見出されるからであるが、死の直前に公刊されたという第二巻『快樂の用法』および第三巻『自己への配慮』においては、この主題が分析されているかどうかは現在のところ不明であり、わずかに『自己への配慮』に含まれたらしい、修道院制度に伴う性的現象を記述した「純潔の戦い」なる断章を手にして

いるのみなのである。
神への献身の場所であり禁欲の空間である僧院ないしは修道院において、結婚以外の性的関係をいう姦淫は、戒律の説く八つの大罪（姦淫、大食、貪欲、怒り、怠惰、安逸、虚栄、傲慢）のうちでも最上位に位置づけられる

きわめて特異なそれであり、禁欲との戦いの中の最も困難で最も決定的な拠点であるが、「同年令の若い修業僧とのあらゆる交渉、あらゆる関係を避けるべし。彼らから火を逃れるように逃れるべし。彼らの仲立ちゆえに敵によつて火をつけられ、永遠の焰にかけられる人々、悲しかな、多し」とはカエサレアのバシリウスの言葉にあるとおり、修道僧たちが最も強く魅了され、その指導者たちが最も強く恐れていたのが、単一の性による男色であり同性愛であったことは想像に難くないところである。もちろんフーコーが『知への意志』の中で、「男色——かつての民法あるいは教会法のそれ——は、禁止された



行為のひとつの典型であったし、その本人はそれらの法的主体でしかなかった。十九世紀の同性愛者はひとり的人物となったのである。つまりひとつの過去、歴史そして幼年時代、性格、生きかたとなったのであり、無遠慮な解剖学やおそらくは隠し立てする生理学とともにひとつの形態学ともなったのである。(中略) 男色者はひとりの再び罪に陥った人であったのに、同性愛者は今やひとつの種族なのである」と記しているように、同様の性行為ではあっても、時代が異なればその意義も違っているのは当然であるが。

したがって僧院と監獄との間に知覚されるものとは最

後に、男色と同性愛との差異でもあることが了解されるであろう(『知への意志』の邦訳は未刊である)。

今は眠れ

「眠りは死に似かよい、共同寝室は墓地に似かよう……共同寝室は共同使用であるけれども、だが修道女たちが相互の姿を見ずに寝起きできるように寝床は配置され、引幕を用いてきっちり閉ざされている」という引用が『監獄の誕生』に見受けられる。監獄にいたことも僧院にいたこともなかったフーコーであり、したがって単一の性しか宿らない共同寝室で眠ったことのなかったはずのフーコーではあるが、「何故に？」と問うことはおそらくわれわれには禁じられていよう。同性愛者であったミシエル・フーコーは死んだのである。今は眠れ、安らかに眠れ、墓地の沈黙の中に。

(たなか ひろいち・非常勤講師)

図書館問題

…図書館事業基本法の
実体化としての
学術情報システム…



なぜ図書館ネットワークなのか？

書評編集委員会

70年代初頭より社会教育審議会から口々にのぼりはじめた図書館政策は、78、79年から80年代へと急激に進展をみせた。図書館員連盟や日本図書館協会、文部省、国土庁、自治省等が動き始めるなか、81年9月1月付で、図書館関係11団体によって構成される「図書館事業振興法（仮称）検討委員会」は、「図書館事業の振興方策について（第一次案報告）」を答申した。これを「図書館事業基本法」として国会上程がもくろまれていた。しかしながら、第一次案をめぐって、図書館界では論争がまきおこり、多くの問題点が指摘されるなかで国会上程なきまま、すでに3年を経過している。

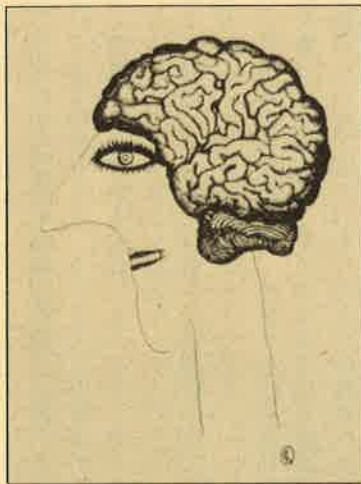
主要な批判点とは、「この『図基法』構想が、実質的には、内閣に強力な図書館政策委員会を設置し、コンピュータ・ネットワーク・システムを通じて、あらゆる種類の図書館を、国家が一元的に管理する内容をもった、新型の統制立法である」（季刊としよかん批評・創刊号）ということになる。項目ごとに追っていくならば、「学校図書館と公立図書館を一体化した共同利用の図書館」「図書館ネットワーク」「共同保管図書館」「図書館センター」「専門職員」等々の問題点が現場をはじめとして批判されている。

では、図基法の国会上程が見送られたことをもってこ

とが終息したかといえば、そうではない。その実体化は現場への直接介入によって進められつつある。その中心が「学術情報システム」である。これは日本及び世界の大学の学術情報を集中・管理し、日本の科学技術立国政策に活用していこう、という国家プロジェクトで、軍事・食料・エネルギー等にわたる総合安保戦略の技術部門に「不可欠」のシステムとして意義づけられる。しかしながら、あたかも大学図書館の整備・充実であって研究者の為のごとくに語られるのはどういうことであろう。

更に現在文部省が進めているこの「学術情報システム」は東大を中心に、いくつかの専門分野別に指定大学にのみ資料を集中するもので、利用範囲は国立及び主要私立大学と少ないばかりか、分野別指定大学や地域センター館以外は資料集収の予算も削られるというもの、またシステムの利用については利用者が利用料金を払うことになる。つまり多くの問題点をかかえながら、また例えば実現したとしても、中小の多くの私大、短大、専門学校等の研究者は利用できないし（学生はいわずもがな）利用できる研究者でも便利ではない。やはり目的は、N I S T (National Information System for science and Technology) 構想の一環として、大学の研究成果を産業界に役立たせることにほかならず、そこでは大学図書

館の目的も役割も全て意味を喪失してしまふだろう。図書館問題の一部分にすぎない学術情報システムであるが、大学図書館（ひいては大学）の国家管理であるとする視点から取りあげた。完成ま近の総合図書館はコンピュータを導入し、学術情報システムに対応するものとして造られている。また情報処理センターの拡充により全ゆる事務処理が電算化される。その始動を前にして、不十分ではあるが、自らかかわる大学の問題として教員・職員・学生と共に考えてゆきたい課題である。



学術情報システムを 粉碎するために

シトヒ永胸

現場での闘いとしての大学闘争

六〇年代の学生運動の高揚を想起する時、その学生層における大衆的拡がりは、なによりその現場である教育に関する闘争、大学闘争を基盤にしたものであったことが思い浮ぶ。だが、「学園から街頭へ」のスローガンの中で、街頭での敗退以降、また学園への機動隊の導入の後、学生は何処へ行かざるをえなかったのか？

六〇年代末の学生闘争は、やがて七〇年代に入って、二極分解の道を歩んだ。ひとつはさらなる急進化、即ち武装闘争への道であり、もうひとつは日常への沈潜であった。例えば、全共闘運動は戦後思想の否定や近代の止揚ということを自らの思想的課題としたが、だが、その大学闘争の実りをどのように残しえただろうか？

その時、学生たちは、大学における日常闘争を反管理という戦後思想の枠内で闘いながら、逐には、その闘いの中でこの戦後思想の枠を突破して、大学解体を自らの思想として醸成し、学園から街頭にその必然性を軽やかな自由のように生きたのだった。しかし、その軽やかな自由が当然の敗北にみまわれた時、我々は一体何処へおもむかざるをえなかったのか？この敗北もまた私には必然の相貌をもってあらわれたのだ。その時、我々は何を

発見せざるをえなかつたのか？我々がおもひいたのは、おそらく、一様に、各々の現場ということではなかつたか……。私が秘かに自分自身に課したのは、おのれの現場の中で、ひとつは自らの原理に即して行動することであり、もうひとつは自らの原理の正しさを試すことであり、さらにもうひとつはこの現場での闘いの中から新しい原理を取り出してみせることであつた。このことは、大学を現場とするものには、学園の中に街頭を発見し、またそれとは逆に、仮に我々が街頭に出る時があつたとしても、街頭の中に学園を見出すことを意味していた。とすれば、我々が我々の視界から世界を、その原点を喪失することはなかつたはずなのだ。六〇年代末の運動のいずれもが、とりわけ大学そのものの内部には、思想としても運動としても何も残さなかつた。だから、七〇年代から八〇年代において、大学に後退的な現実が生まれたのだ。そして、その結果として、我々は最後の大学再編を迎えているというわけだ。そして、この最後の大学再編の口火を切るのが、学情情報システム（以下、学情システム）の存在なのだ。学情システムは、直接的には、全国の大学図書館と研究機関をコンピュータ・オンラインでネットワークをつくることを目的としている。それは、当然のごとく、官・産・学のリアルタイムな結びつ

きを目差しているが、だが、この学情システムの存在の決定的な意味はむしろそのようなところにはない。学情システムに与えられた情況的役割とは、従来の大学存在を国家、資本の側から徹底的に解体に導くために打たれた大きな布石ということなのだ。学情システムは、確かに、学園の国家管理をより強固なものにするが、さらに問題なのは、こうした大規模なコンピュータ化の現実が、その次には必ず大学事務すべてのコンピュータ化、即ち学生、教職員の徹底的なコンピュータ管理を生み出してくることなのである。こうした情況の中にあつて、現場としてどのように闘うのかというのが、我々が、今、決



して逃れることのできないものとして抱え込んでいる間である。現場の中に世界を発見し、世界の中に現場を見つけて出すという大衆的な闘いを闘い切ることがなければ、運動の高揚も勝利もないというのが、私のささやかな確信である。そして、我々が現場の中に歴史を構築する時、そこには既に革命が胎まれているというのが、私の逢着した結論である。

大学闘争としての学情システム反対

学情システムの実現に当っては、ナショナルセンターになることが予定されている東大文献情報センターを中心に、このナショナルセンターと結ぶ地域センターで、現在、その開発がすすめられている。そして、一応、今年度末には、「目録・所在情報システムの開発とそのサービスの実施」、さらに「二次情報検索システムの開発」を行うということになっている。だが、不完全な条件と、ともかく計画を遂行しようとする強引な文部行政の中で、とりわけ地域センターとして予定されている東工大、名大、京大、阪大等の図書館では、既に様々なかたちでその矛盾が噴出してきている。また、新たに地域センターとしてあげられようとしている東大、一橋大でも、現場労働者と大学当局との間に、摩擦、相克が繰り返されている。

勿論、だからと言って、現場労働者がこの学情システムの存在の意味を明確に意識化し、大学当局なり文部省なりに有効な反撃を加えているかと言えば、決してそうではない。今のところ、文部行政のあせりが、現場労働者の日常をはなはだしく疎外しており、それが現実の亀裂として現象しているということなのだ。

従来、大学は、主として、国家・資本のための人材供給機関の役割を担わされてきた。学生は、大学において付加価値を与えられ、大学を通過する中で選別・差別される。労働力商品として産出される。大学の国家支配からの相対的独立性は、大学が黙黙とこの主要な役割を果たさかぎりにおいて容認されてきたのである。このことの実を明瞭にしたのが、六〇年代末の学生運動であり、この真実の指摘の中で、大学の自治論の虚偽性が明らかにされていったのである。その後、日本の資本主義は、帝国主義間の競争激化の中で、産業構造の転換を志向し、技術立国を自らの延命策として選択していった。そして、その経過の中で、国家・資本は、おのれに奉仕する高度情報化社会の構想において、大学存在の即時的利用にもむきはじめたのである。要するに、技術立国と言い、情報戦争と言うならば、この闘いに勝利するためには、国の科学技術とその情報は、一点に集約され、国力とし

て取れんされなければならぬというわけである。例えば、N-I-S-T構想は、科学技術情報の流通に関して、官・産・学の緊密な連携とその国家管理の必要性をと考えたが、学情システムもまたその一環に位置付けられなければならない。学情システムが学園での闘争でありながら同時に街頭での闘いだと私が考えるのは、この学情システムの存在の本質、国家から担わされた役割が、実に、明瞭過ぎる程明瞭だからだ。国家・資本が大学の具体的な存在そのものをも全面管理し、支配しようとするみ出てきたということでは、それは大学にとってまさに危機のあらわれであるが、しかし現場の闘争が世界の本質を



現出させるということで、これは運動にとってまさに好機と言うべきものだと思われる。学情システム粉碎の闘いが適確な内在批判を伴って大学闘争として闘われるならば、それは必ずや新たな大衆的高揚を生み出す。むしろ、その過程で、再び大学の存在が根本から厳しく問われてくるだろう。

学情システムの粉碎の戦略

(1) どのように粉碎するか

学情システムを粉碎するためには、地域センターとなる大学図書館を封鎖しなければならないと言いたいところだが、こういう即時的な戦術をとる前に、我々がしなければならないことがある。それは、やはり、学情システムを内在的に批判し尽し、学情システムの本質、ねらいを大衆的に明らかにすることである。全国の大学において、学生、教職員が共同して、大学当局、大学図書館当局に当り、学情システムに対する自らの位置付けとその関係を明らかにさせ、学情システムの否定を確認、宣言させることである。そして、この闘争を燎原の火のように全国に拡大しなければならない。学情システムの形成に当っては、個別大学図書館のコンピュータが前提とされており、自らの大学図書館がこの学情システムに

加わるか否かの問題は、それはそれで個別大学の課題であるが、学情システムが全国の大学図書館の加入を前提とするかぎり、その具体的側面においても、この個別大学の課題はそのまま全国総大学の課題となっている。勿論、その本質を問うならば、その問題の共通性があらわれてくる。少なくとも、学情システムの計画が不完全にしか遂行されていない現在においても、国立大学や私立大学の図書館の新築改築や、特にコンピュータ化に際しては、学情システムが意識されていないということなど決してありえないのだ。個別大学の現場での先駆的な闘いの噴出を待ち望み、我々の運動との連帯を模索したいと思う。

(2) 条件闘争も闘いのひとつだ

情況に応じて我々は条件闘争を闘うことも可能である。大学図書館は、一般に、大学の教育研究に奉仕するということを手無批判に容認しており、単に大学の一機関としてしか機能していない。とすれば、彼らには、学情システムの技術的な側面でのいくつかの指摘が有効かもしれない。例えば、次のような問いかけに、彼らは答えられる術を持たないだろう。ナショナルセンターに情報が集中されるが、情報の国家管理、統制がすすめられる可能性についてどう考えるのか？どのようなものをデータベース



に入れるかを決めるのは、文部省に近い部分だろう。データベースに記録されているかあるいは引用されているかを参考として、研究費の助成をコントロールするならば、自然、学術研究と研究者の国家管理が行われる。また、アクセスするには非常に金がかかる。有料は近代図書館の原理に反するだろう。学問というのは、あらかじめの情報を必要とするとかわかっていて検索していくものではない。コンピュータで検索できるからと言って、本を直接手に取って見ることができないとすれば、そんなことで学問の発展が望めるのか？既に、地域センターとなるところでは、一次情報の集中が行われており、地

域センターとつながれるメンバー館では大幅な予算削減が行われている。また、文部省は従来どおり企業の利用を認めると公言している。計画の進行の過程で、旧帝大、新構想大、大手私大等以外では、端末機が置かれる可能性が皆無に等しいことが明らかになった。そうした状況において、企業の利用を認めると公言するとはどういうことなのか? さらに、この大学間格差と差別の助長をどう考えるのか?

(3) 戦略目標として図書館大会粉碎

学情システムの推進に直接当たっているのは、文部省であり、先に述べた東大文献情報センターであり、個別大学図書館である。しかし、これを側面から強力に支えているものとして、日本で最大の図書館職員の職能団体である日本図書館協会の存在がある。この日図協は、自らの組織や機関紙である『図書館雑誌』を使って、この文部省の政策に翼賛をつづけてきている。特に、彼らは、年に一度の図書館大会の中で、全国の図書館員を集め、そのこうかつで強引なやり口で現場労働者にも翼賛を強いてきた。とりわけ、今秋の図書館大会は、大阪の地で開かれ、そのテーマは、学情システムの稼動に一役買ったかたちで、「情報新時代の図書館づくり」などというものを掲げている。最後に、この日図協の粉碎、即ち図書

館大会の粉碎を、その重要な戦略目標と設定し、闘いを組む必要を付加しておきたい。

付記

学術情報システムの全般的紹介と解説については、私もこれまで何度か書いてきたことがあり、他に優れた論稿があるので、ここでは、「粉碎するために」ということに論点をしぼった。もし学術情報システムについてもう少し詳しく知りたいという方があれば、次のような拙文を参照して下さい。

(1) 「高度情報化社会」と大学の現在」

『インパクション』第二九号（一九八四年五月）六

四一七—六頁。

(2) 「学術情報システム症候群」

『季刊クライシス』臨時増刊「けつとばせ」臨教審」

（一九八四年八月）七四—七七頁。

（むねなが ひとし・学術情報システムを考える会）

大学図書館の「解放」 序論の序論

木村 隆美

大学の図書館を考えようとするとき、僕たちは、原則的な難問にぶつかる。ましてや、その大学図書館をめぐって、ラジカルな運動を起こそうというのは、至難に思える。今、「臨教審」を目にして、様々な「教育論議」が世間を賑わせているが、事の本質は一向に変化していない。

一時代前、公立図書館界で、公立図書館といえども（行政）という権力機構の末端なのだから、住民へのサービス云々という発想はナンセンスだ、という論調が現われたことがある。これはその当時、「サービス」視点一辺倒で、自治体労働者の内在させている矛盾に目をつぶる傾向の運動へのアンチとしては意味を持った。しかし、アンチはアンチ、「権力機構の末端」一辺倒で、公立図書館の限界を広げ可能性を現実化させる運動の自己意識とはならなかった。

いま公立図書館をめぐる攻防の主軸の一つは、政策面における、国家権力の中央集権化志向と、自治体（地域住民）の地域分権意識の具体物としての公立図書館との対立関係である。（詳論略）

いまひとつの主軸は、利用者住民との関係である。（納税者）としての住民の（右より）意識が前面化すれば、たちまち（臨調行革）路線並みの（減量経営）や（受益

者負担」の具体化という方向が生じる。利用者住民の（納税者意識が、単に〈小さな行政府〉要求ではなく、自分たちの手による自治権の獲得という方向へ踏み出すとき、その一媒介機関としての公立図書館も、ラジカルな存在へ転化する可能性が生まれる。

現代社会システムの一環として、同じ図書館ではあつても、公立図書館の場合は、右のように、自治体労働者の存在論的矛盾を内的要因とし、利用者住民の自然的要求を外的条件として、そのシステム内の異質物として自己変革し、ひいてはシステム全体の変革との連動という展望を持つことができる。

これに対して、大学図書館の場合はどうだろうか。利用者学生の意識は？ 内的要因としての大学図書館員の存在と意識は？

大学図書館をめぐる真摯な考察がぶつかる困難さとは、いうまでもなく、〈大学〉という存在自体のいかがわしさ、由来している。このいかがわしさをめぐる〈大学論〉というものも、あまたあるが、どれほど実践的か。

いわゆる〈大学論〉というのは、六〇年代末の全国学園闘争時以来、否定的な論調はほとんど出尽した感がある。そして、今では、大学の職員の中から「ぬくぬくと

囲い込まれた特権の場」「腐敗と頹廢の中から舞い上がるヨタカがミネルヴァのフクロウよりも高くとぶ一片の可能性に賭ける」浅田彰「構造と力」と言う人まで現われている。この考え方、言葉は、あまりに否定され尽したので、逆に大学内で居直つてやろうという（マニユフェスト）といえる。

〈浅田彰現象〉などと世にかまびすしいが、右のような浅田クンの大学論については無視されているが、どうしてだろう。〈浅田彰現象〉などとフィーバーしたマスコミの仕掛人たちは、浅田クンと同じ大学観をもっているのだろうか。あるいは、〈大学出〉ということにいささかのヒケ目を持つ世代に属しているのであれば、浅田クンの〈マニユフェスト〉は、強力な援軍だと感じたのかもしれない。

ところで、凡百の大学論と異なり、全共闘の大学論が実践的に鋭利であるのは、今も変わらなない。

全共闘運動が提起した大学論は——中卒がいて、高卒がいて、大卒がいて、さらに東大卒がいて、この間の上下関係は社会的に厳然としている。「大卒だからといってイバルのはよしまししょう」「中卒だからといってヒガムのはよしまししょう」という〈心の持ち方〉レベルの問題などでは全然ないということだった。どのクラスの学校卒



かで企業組織の中での位置が決まり、社会的位置も決まってくる。中卒は、現場労働者であり、高卒は頑張ったところで現場主任・中間管理職どまりであり、トップは大卒にかぎられ、さらに一流企業の部長、高級官僚などは、一流大卒か東大卒の中から選ばれる——こういう現実の關係は、(心の持ち方)以前の前提条件であり、この前提条件こそが諸悪の根源だというのが全共闘の大学論だった。

この大学論は、さらに、経済社会的に基礎づけられる。資本主義社会というのは、その根本的関係が資本家対賃労働者であるが、歴史的現在における資本主義社会は、資本家が資本の力によって資本家の仕事を肩代りさせる「労働者」を多数獲得するに至っている。それも、ただ莫然と多数いるのではなく、生産システムに対応して、「位

階的」「等級的」に編成された組織であって、この階層的組織体こそ、現代資本の現象形態といえる。こうなると、「労働者」といっても資本家の代理人となってしまう。それは、単に、感情やイデオロギーのためではなく、存在が「資本家代理人」だから、資本家の意識を持つようになっているのだ。

このとき、階層組織の、どの位置に、誰を、どのような基準でもって配置していくのか——このシステムい

んが、資本主義社会の活性度を左右する。イギリスは伝統的な階級社会であって、出身による階層化が厳然としていたため、「立身出世」を夢みての社会的流動化は少ない。「イギリス病」の根源、また、イギリス労働者の団結の固さは、ここに由来している。

アメリカは、資格と能力主義の典型国だ。独学でも「高級」な資格をとれば、政府の経済スタッフになることも夢じゃない。しかし、資格のない者は、徹底して雑役仕事であり、有資格者も相互競争のストレスに耐えなければならぬ。これは、いわゆる「フロロンティア・スピリッツ」の現代版であり、かつ、アメリカ労働運動の保守性の最大要因でもある。

さて、この日本では、(中学・高校・大学)という公教育が、この階層的人口配分システムの基礎となっている。

これは、資本主義社会の活性化と安定化という二律背反的要求を、実にうまく処理するシステムだった。一方では、「勉強さえすれば、誰でも出世できるんだ」と夢を抱かせ、他方では「どうせオレは高卒だ、大学出に抑えられてもしょうがない」とアキラメさせるといふ、二つの相反する社会的動因を同時にさばいていく、きわめて効率的なシステムだった。このシステムが有効に作用していたからこそ、五〇年代後半から一〇年以上にわたる高度経済成長が可能だったのだ。(その他の要因が日本と同じでも、このような公教育システムを持たない国は、幸か不幸か、日本のような「高度経済成長」を真似ることはできない。)

全共闘の大学論は、右の意味において、戦後日本を総括する基本的視座を提起している。もちろん、労働者が、否定すべき対象の資本に、自ら労働力を売らなければ生存できない——否定すべきものに依存している、一体化している、のと同じ意味で、学生も教官も、否定すべき(大学)に依存せざるを得ないのだという見方ができなくもない。しかし、学生の場合、その「否定すべきものへの依存」も4年間の「お勤め」を済ませれば、あとは社会的高位置を約束されているのである。教官の場合は、一般労働者に較べれば、はるかに高い賃金を得ている

のである。

そこで、全共闘運動は、そのような大学へ、僕は、あなたに、居続けるのですか?という問いかけだった。

YES——という中で、最も強敵なのは、やはり浅田クンの対応だろう。システムの悪を認めつつ、その内からの可能性に賭けると言って居続けることによって、システムの存続を支持しているからだ。

NO——という中で、最も破廉恥なのは、では大学をやめますと言いながら、「学問」以外の特技を生かして、資本の階層的編成の中の他の高位置を確保することだ。糸井重里なるコピーライターはこの典型である。

では、NOといい、いわゆるルンペンプロレタリアートの一員となって活動するとして、この人に、何らかの資本主義帝国変革の展望を把むことが出来るか?

(大学)が、公教育の一般的頂点として、国家・資本の再生産システムの支柱となっている。その大学の中の(部分)にすぎない図書館に、自然的に、このシステムをラジカルに変革する契機などあるはずがない。(学情システムをめぐるほとんどの大学図書館員の対応の鈍さが、このことを実証している。)

それでは、なぜ、おまえは大学図書館にこだわるのか

と問われると、返答に困る。僕の友人の中の数人が、大
学図書館に勤めているから、というのが正直な回答だろ
う。しかし、敢て、「序論の序論」などという文章を書き
出したからには、もう少し、一般的な見解を提出してお
かねばならないと思う。

僕たちは、現代社会システムの下部に位置する者とし
て、公立図書館、大学図書館、学校図書館等を別物とし
て考えることが習い性となっている。しかし、おそらく、
システムの統括者は、例えば、図書館を統括する位置に
ある者は、図書館をすべて一体のものとして捉え、それ
ぞれの役割分担と関連を総合的に展望し、その実現を夢
見るに違いない。その夢が、夢のうちにとどまっている
間は、僕たちと彼とでは、たいした差はない。しかし、
彼の「夢」が現実化する条件が揃ったとしたら……？

既存システムの図書館統括者の「夢」を実現する条件
としては、このシステムが、いわば世界的先端にまで
せり上がることはないだろうか。古代エジプトのアレ
キサンドリア図書館でも、ビザンチン帝国のコンスタン
チン大帝文庫も、それらはすべて、その文化が世界的
先端に位置するとき、自らの文化の自己意識の総体とし
ての、図書の組織的収集・保管を意図されたものだった。



今、日本は、経済的に世界のトップクラスにある。ま
た、例えば、「鮭」が「正油」が「豆腐」が、アメリカで
普及しつつある、あるいは、山本寛斎の店が、パリやミ
ラノ等の外国都市に進出している、あるいは、流行歌、
演歌は東南アジア諸国を席捲している。アメリカの「コ
カ・コーラ」や「マクドナルド」ほどではないが、生活
レベルの「文化」が、日本から海外へ進出していること
にはちがいない。

かつて、戦国時代、諸外国との交易が盛んだった日本
は、他国に先がけ、鉄砲生産を、紙製造を工業化してい
た。と同時に、諸外国へ進出し、「大航海時代」といわれ
た世界史の先端を担ったことがある。今、また、歴史は
めぐりきて、日本は、世界史的先端に位置しつつある。
ということは、現代社会システムの統括者としては、

自らの国家・社会の自己意識としての文化を、その枢要的担い手としての図書類を、組織的・網羅的に収集・編成して、ひいては自己の活性化のために再利用したいと考えはじめたとしてもおかしくない。すなわち、全国全館種のすべての図書館の上からのシステムの統合の条件が生まれているわけである。(この事態の、法的表現が、「図書館事業基本法要綱案」であることは、いうまでもない。)

このような状況下では、公立だ、大学だと違いを言い立てては負けるしかない。既存システム強化のための上からの統合化に対抗し、既存システム変革のための下からの連帯を展望することが必要となる。

そこで、では、何か具体策はあるのか、ということだが、とりあえずの戦術として、学生であればどの大学の図書館も自由に利用できるシステムの追究はどうか。(もちろん、市民の自由利用の実現は当然のことである。)

「学情システム」が「資源の共同利用」を謳っているなら、まずもって、どの大学の図書館でも学生であれば自由に利用できる、ということが実現されねばならないのではないだろうか、と、彼らの謳い文句を逆手に取ろう。もし、当局が、学生のこの要求を拒否すれば、その拒

否の論理の中に、現在進行中の「資源の共同利用」のまヤカシが浮かび出て、既存システム強化のための上からの統合化という、彼らの戦略の一端が垣間見られよう。そうなれば、それは僕たちの一歩前進である。更に先へ進む手がかりが把めるからだ。

大学図書館をめぐる運動は、大学自体が否定されるべき以外の何物でもないという理由において、その端緒から大きな矛盾を孕む。しかし、それは、逆に見れば、「大学の死」を恐れずに運動を進めることができるというプラスに転化させることが可能だ。困難な作業ではあるが、負債はすべて彼らが背負っている。シーザーのものはシーザーへ。陽気に解放への関の声をあげようじゃないか。

なお、10月27日(土)午後18日(日)午前、府立労働センター(予定)において《いま図書館に何が問われているか? 現場からの反撃'84》(仮称)が開かれ、その第5分科会では、教育状況と図書館をテーマにして討議が予定されています。みなさん、ふるって御参加下さい。僕も参加する予定です。詳細の問い合わせは、追手門大学の胸永さんが窓口になっています。(大阪府茨木市西安威2-1-15・0726-43-5421) (きむら たかみ・図書館労働者の会・横浜)

参考資料

- * 国立国会図書館開館30周年記念「図書館協力ネットワーク」に関する国際シンポジウム」における有馬議員の基調演説・図書館雑誌79年4月号
- * 全国図書館計画〔試案〕——公共図書館の広域システム化計画・全国公共図書館協議会編集・発行
- * (小特集) JAPAN・MARCガイドランス・図書館雑誌80年6月号
- * (特集) 最近のISBN・図書コード問題をめぐって・図書館雑誌80年10月号
- * 本は管理できるのか——ISBN問題を考える・東京都渋谷区職員労働組合教育部会図書館職場会発行81年
- * 図書館事業振興法(仮称)検討委員会 図書館事業の振興方策について(第一次案報告)・図書館事業基本法要綱(案)・図書館雑誌81年10月号
- * 清水正三「図書館事業基本法要綱(案)」についての疑問・こどもの図書館81年11月号
- * 図書館労働者の会・横浜 図書館の労働者運動(3)——「図書館事業基本法」は図書館運動を誤った方向へ集約し、図書館への政府の直接介入を招く、危険な性格をもち、月刊自治研81年11月号
- * 図書館事業基本法に反対する(基本法教宣シリーズ)
 - ・国立国会図書館職員組合発行81年
 - * 東大図書館に進行する人権破壊」・東京大学総合図書館職員組合80年
 - * 「大学図書館の発展方向を問う——学術審議会公答とその後——」・大学図書館問題研究会81年
 - * 図書館労働者の会・横浜 図書館の労働者運動(番外篇)——図書館事業基本法と図書館労働者交流会・月刊自治研82年1月号
 - * 図書館労働者交流会ニュース・図書館労働者交流会発行82年
 - * 昭和56年度全国図書館大会記録・埼玉・昭和56年度全国図書館大会実行委員会編集・発行82年2月
 - * 図書館労働者の会・横浜 図書館の労働者運動(番外篇2)——図書館新立法の行方——図書館事業基本法案は現実を前進させるだろうか・月刊自治研82年3月号
 - * 図書館事業基本法に反対する会結成集会資料集・図書館事業基本法に反対する会発行82年4月23日
 - * 図書館事業基本法に反対する会ニュース・図書館事業基本法に反対する会発行

*〔特集〕岐路にたつ図書館界と私たちの図書館政策づく

り——第29回図問研全国大会基調報告・みんなの図書館'82年9月号

*「追手門学院大学図書館職員研修誌」No.1抜刷 学術情報システムを考える

* 大学図書館の現在(いま)を考える・学術情報システムを考える会発行 '84年3月31日

* 図書館があぶない!・学術情報システムを考える会発行 '84年2月

定期刊行物

* 季刊としよかん批評・せきた書房 1~5号

* 大学の図書館・大学図書館問題研究会

* 図書館雑誌・日本図書館協会

* みんなの図書館・図書館問題研究会

* 日本読書新聞

* 図書新聞

* インバクション 29・30号

* 出版ニュース

内

10月27日(土)午後2時～
28日(日)正午

いま図書館に
何が問われているか?
—現場からの反撃集会'84

場・大阪府立労働センター
内・27日

全体会Ⅰ(2～4時)
分科会(4～9時)
交流会(9時30分～)

28日
全体会Ⅱ(9時30分～12時)

主・実行委員会
連・追手門学院大学図書館内
胸永ヒトシ

案

10月26日(金)
学術情報システムに
反対する集会

時・午後6時～9時

場・大阪府立労働センター

主・学術情報システムを考える会

連・事務局：大阪府茨木市西安威
2-1-15

追手門学院大学図書館内
TEL 0726(43)5421

— 連 載 —

聞き書き — 部落に生きる人たち ⑤

学校で差別を体験した

話し手 尾 崎 覚さん
1920(大正9)年11月26日生

西 田 政 夫さん
1922(大正11)年12月25日生

大 垣 春 雄さん
1931(昭和6)年11月10日生

聞き手 田 宮 武

教師は差別の加担者であった

——(丸尾良昭支部長)南但の部落差別の実態について聞き取り調査に来てもらっています。調査の目的は、八鹿闘争というのは部落解放闘争のなかで大きな位置をしめる大闘争だったわけですけど、あの闘いのエネルギーはどこから生まれたのか、それまでの部落差別の存在、それにたいする反発はどのようなものだったのかということ、特に戦前、戦中、戦後にわたって、いろいろと話を聞きながらまとめてもらおうとしているわけです。そういうことで、みなさんが何んでもないと思うようなことであっても、腹立ちまぎれの、あるいは笑い話のようなことであっても、あつたことをありのままに話していただくとういと思っています。なるべく、関係者の名前とか、事件のあつた年代とかを特定できる方がよいんですが、差別にどう抵抗したか、部落の人たちがどのようにならうに騒いだか、あるいは警察がどう動いたかとか、話していただくと結構かと思っています。

丸尾さんのいわれたようなこと以外にも、部落の生活、仕事についてもあわせて聞かしていただけないかと思っています。この部落では、尾崎森之助さん、

その弟さんの尾崎行夫さんと、浅田林蔵さん、浅田与一さんにお話を聞いております。いままで聞いた話をあげますと、解放令反対の一揆がこの部落まで押し寄せて来たが、その襲撃を食い止めたことと、それから大正末に、竹田駅前前の運送店の経営者がこの部落出身で京都へ嫁いでいる女性に差別発言をして、その糾弾闘争をうったことと、それ以降でいうと、尾崎行夫さんの方から水平社運動とは違った、警察とか憲兵だとか、そういう人といっしょになつて啓蒙運動を一生懸命にやつていて、この南但地方を一人で走り回つていたこととか、そんな話を聞いております。そんな話でなにか補足していただけることとか、全く別にこういうこともあつたとか話してほしいんですけれど、丸尾さんから少し聞いていて、みんなの方から詳しく聞いていないのは、中川小学校（朝来郡朝来町）で「トンビはトンビ、タカはタカ。生まれは変わらん」といった差別発言を小学校の先生がされて、それが大正末に大きな事件になつたと聞いています。その辺のことを話していただけるといいんですがね。

尾崎 わたしらが尋常高等科の二年生の時に、柳本という先生が担任でしたわ。香住（城崎郡）から来ていて、

背の高い先生やつたね。柳本という姓だけは憶えているんですけど、新井の大田垣さんという家に下宿しておりましたね。

あれは、昼食の時間でお弁当を食べるときに当番がお茶を配つていたらね。お茶を入れるのにつけ、「食器を出してくれ」と言つとつたら、立脇という地区の子やと思うんやけど、「どこそこの」子がお茶をえつたあ、えつたあ」と言つて、そういう発言をしたんやわ

——お茶は誰が入れる当番をしていたんですか。

尾崎 お茶の当番は、誰やつたかな。記憶が定かじゃなけれど、女の子やなかつたかと思うんやけど……。

——この部落の子がお茶の世話をしていたんですか。尾崎 男の子と女の子がいつしよにしていたね。男の子は誰だったか、名前を憶えてないけれど、この部落の同級生でした。女の子は立脇の子じゃなかつたかと思うんですけど。その二人がお茶を入れて回つていると、「お茶、えつたあ、えつたあ」と言われてね。「なんで、えつた言うんや」と言うと、「えつたはえつたと言つて、なんでもないやないか。かまわんやないか」という発言があつてね。その昼食の当番の時には、担任の先生は教室でご飯を食べてないしね、職員室におつたわけやし……、子どもだけでご飯を食べながら、喧嘩みたになつてね。

「なぜ、言うたんや」と、子どももごころに抗議したわね。まどまったことばにならんだけど、今でいうたら糾弾にはならへんだけど、子どもごころに「なぜ、言うたんや」と、言い合いになつたわ。相手の子どもは「ぼくらのおとうさんやおかあさんが、えつたあ」と（どこそこの）ことを言うさかいに、言うたんやないか」というような話になつてね。そんな言いあらそいになつて、先生ごころへその話を持って行つたんやな。

——この部落の子どもが担任の先生に訴えたわけですか。

尾崎 昼からの授業が始まった時に、実はこうこう、こういうことがあつたんやと先生に言うたんですわ。もう亡くなりましたけど、石本和彦（音読み）に、わたしに、大西親ちゃんもおつたんや。この部落の同級生は大勢おつたのに、三人ほど先生ごころへ行つて、こんなことがあつたと言つたら、その時の先生が悪かつたんやな。それをお前らがなんぼ言うてもあかんのや。まあ、電信柱の高いのも、それを短うなれと言つてもあかんのといつしよ。カラスが黒いのを、白うなれと言つてもならんやし、カラスはトンビにもならへんのやさかいに、ほんでもう……」あきらめいのか、我慢せえいう意味のこ

とを先生が言うたんやないですか。それで、先生にはラ

チがあかんのので、解決せんさかいに、村の青年に言うて行つたんやね。

その時の青年団の団長をしつたのが、大垣末治さん（音読み）やつたと思う。そうそう、あの人が結婚して間なしやつたな。大垣末治さんに持つて帰つたら、「部落の集会所に集まつとれ。ぼくも行くさかいに……」と言うことで、大垣末治さんが生徒を集めて一晚相談した。「そうか、それだつたら、青年だけの解決ではいかんさかいに……」と、部落の役員さんに相談をかけて、部落で集会をしたことがありますわ。その時は、わたしらは学校であつたことだけを言うてね、その集会では一番後の壁のところにおつただけで、大人がずうつと集まつて話しよるのを聞いておつただけやね。

その当時、物部（ものべという地区）の黒沢なんかいう先生、泰三といったか、あの先生が尋常高等科の先生の担任だつたと思います。あの先生が同じ高等科の先生やつたで、柳本先生をかばつたんやな。青年が学校まで行つて、柳本先生に何日に村へ来てくれと言いつたおりに、泰三先生が柳本先生が一人では心もとないで応援するような形で対応したんやないかと思うんです。その時に、わたしははっきり分からんけど、青年の心におもしろからんことを言うたもんと思う。泰三先



生に「おまえも、ことばの上では、そういう発言が無うても、心の中では（差別）意識を持つてるんやで、出て来いッ」と、泰三先生も引っぱられて来たでえ。二人とも来たでえ。

その時に、女の先生も来たぞ。熊沢先生という女の先生も引っぱられて来たぞ。ということとは、女の子の家庭科の時間で、福神漬を作るいうことになっていてね。家庭でつけたたくわんを持ち寄って、そのたくわんを塩抜きというて水の中につけて、塩をにがしてしもうて、こまかく切って福神漬にするんやけど、「わたしら」の持つて

行つた大根はごみ捨て場に放されておつた」と。たしかそういう話やったと思うわ、間違いないと思うわ。この部落の女の子が「たくわんがごみ捨て場に放されておつた」と、家に持つて帰つておかあさんに話したんやろうね。おかあさんはやつぱり昔の人間で、親の代から何十年も差別に虐げられても、「言うまい、言うたら困るし：」と我慢しとるんやな。押えつけられた気持ちも習慣になつてしもうていて、おかあさんは子どもの話をもみ消してしもうて、公に訴えることがなかつたんやけども、柳本先生の糾弾があつた時に、一挙にこういう話も持ち上がつて、「実はこんなこともあつたんやでえ」となつて、熊沢先生も呼ばれてきたんやと、わたしは思うわ。

熊沢先生はその時「いや、わたしが放つたんではない」と言うて、もうなすりつけや。した者がおらへん。した者がおらんけど、放られておつたのは事実や。「わたしはしたことはない」と言うし、どこをつかんでいいやら、雲をつかむような話やったけど、大根を放られていたことは間違いないんやで、校内で差別がまだ燃えていることは確かなことやでえと、あの時はだいぶもめよつた。わたしらは子どもやで、先頭に立つて糾弾する人のことばが分かるような所におつたわけではないけど、そういう思い出があります。

それから、一週間ほどもめていたんではないですか。わたしら、四日間ほど学校へ行けしまへんだええ。

——それは同盟休校ですか。

尾崎 まあ、同盟休校といえるわな。解決するまで、学校へ行かせんと言てね。わたしらは上級生だったので、お寺で学んだりしました。

——上級生というと。今の話は小学校二年の時の話ですわな。

尾崎 それは、尋常高等小学校で、高等科の二年生の時やった。それで、小学校の中で一番上級生やった。その思い出はあんたにないか。

西田 あるわあ。詳しくは知らなかったけど、記憶はあるな。

——そうすると、尾崎さんは大正九年生まれで、高等科二年生というと昭和八年ごろになって、丸尾さんの言っている「トンビはトンビ、タカはタカ。どうしてもトンビはタカになられへん」という発言のあった大正末期の事件とはまた違った事件ですね。同じ中川小学校で多分何度も差別事件を起こしているのでしょうね。

それが差別だと気づかなかつた

西田 とにかく、その当時、「同和」地区とか、部落とか、そんなきれいなことばを使つてなかつたですね。「えつた」とか「新平」とか、要するにえげつないことばでしたね。自分らを教えてくれた親らは「ここは部落だ」とか「穢多村だった」とかは教えてくれんけどね。一般地区の父母は自分の子どもに教えているわけですわ。自分らは親からそういうことを聞いてないから、相当てげつないことをされとつても、気づかなんだ。現在考えてみると、あれは差別だったのかということはできませんけど、当時は本当に考えが疎かつたですね。相手はもう一年生になると「あの部落の子とは遊ぶなよ。あんな子は行儀が悪いから……」と教えられとつたんですわ。自分らは六年生か、高等科になって、「なんでこれだけ何をやってても、一般の子と別々にされるような格好になるんだらう」と、ぼつぼつ知恵がついてきたですね。親から教えられないでも……

わたしは六年生の時に、今から四十数年前のことやけど、当時代が貧乏だったのでね、同和会の給食をもらつたんですわ。ここの中川村立尋常高等小学校の中で、同和会補助をもらつて、学校の一室で給食が出るようにな

ったんです。他の人はみんな弁当を持って来よるし、同じ部落のもので富める家の子どもはみんな弁当を持って来とったんです。ぼくら貧乏人だったので、弁当をよう持っていかんしとったら、生活困窮者の子に給食が出るようになつとった。その時に、あれは石田くみさんというお婆あさんがご飯炊きをしとつてね。そのお婆あさんがご飯を炊きよつてね、「ここは（どこそこの）子どもばつかりやから……」とか「（どこそこの）子どもばつかり食べに來るところやさかいに、なんたら、行儀良う食べなよッ。これッ、（どこそこの）子ッ」と言うて、頭を叩きよつたわいな。「えつた」とは言わんですわ。一般地区の子どもでも、同じように貧乏人もおつたわけですけど、その子らには給食は出していなかつたんですな。それで、お婆あさんは「あんたら、ここは（どこそこの）子ばつかりやさかいに、ごぼさんように行儀良う食べないと、あかんでえ」と言いよつたわいな。

それと、ご飯は一杯きりで、みそ汁だけがおかずでしたわ。そのみそ汁を注ぐのに、お婆あさんがさつき言つたよなことばですが、「ああ、みそ汁えつたあ、えつたあ」と。その次に「あんたら、ようけ食べ言うたら、こんなこつちや」と、よう怒りよつたわいな。わしらはもう六年生になつとるんやさかいにお婆あさんの言

うことに怖いことないはずなのに、やつぱり食べ物にはかえないせんわ。怒られんように行儀良うして、ようけ食べたい、ただもう食べたいだけでした。だから「みそ汁をもう一杯下さい」「ああ、えつたあ、えつたろ」と、こういうことに入れてくれよつたですけどね。その時には、なんの反応も自分らにはないんですわ。

——この辺では「入れる」ということを、「えれる」とか言いますか。

西田 入れた、えつたと言う。今の七十や八十歳の年寄りになると、入れることを「えつた」「えつたろ」と言います。だから、自分たちはまだ六年生ですから、何の反応もないんですわ。ただ食いたい一方で、どない言われようが、こない言われようが、とにかく腹一杯にふくれたらええんじやと思つていたけどね。實際考えてみたら、あれは無意識に出たことばではないですわ。「えつた、えつたあ、えつたつたがあ」と、こようやるんですわ。相手はお婆あさんですし、ぼくらはやんちゃ盛りの時ですから、そういう意図が分かつていたら、お汁茶碗でもぶつつけたかも分らんけど、なんにも分からなんだですわ。それと、分かつたしなかつた。とにかく腹一杯食いたいからね。

そういうことは学校を卒業してから世間に出てみて、

はじめて気づきましたわ。この村の人は学校出て、定職がないから、当時奉公に京都だとか、大阪とかへ出るんですけど、そのつどよう辛抱せんのですわ。ということとは、学校を卒業してある程度自分らにも知恵がつくしすると、見るものがすべて自分らにとつて余りにも哀れで、よう辛抱せんとか村へ帰ってくるんです。その時分に、「おれは学校へ行つとる時に、あのおぼあさんにひどう苛められたがあ……」と、しみじみ分かりましたわ。「えったあ、えったあ」ということばの意味が痛切に分かつてきました。ところが、小学校当時は分からなだね。

——小学校の時でも、一般地区の子どもらは「えったあ、えったあ」というようなことを言うんですよ。その子らはその意味を分かつとるんですよ。「あの（どこそこの）子はえったやろ」と、父母から教えられとるんですわ。ところが、こちらの方は教えてくれしませんでしてね。「うちの村は「こういう村や」ということを、わしらは聞いてへんからね。その当時は何の自覚も持つとらへんだな。学校を卒業しても就職はないし、この部落はもう土方、建設仕事ばかりでした。誰も鉄道に行きよるとか、公務員になつたとかいせんわな。なおかつ、貧乏なので、旧制の中学校へ行きよつた者もなかつたやろうな。ぼく

らの年齢で、男子だけで二十人おつた。貧乏のくせに、子どもだけが多かつたんやね。女が十二人おつて、同級生が三十二人で、今やつたら一学級持てるくらいおつたんやけども、旧制の中学校へ進んだ者は一人もおらんのだでえ。旧制中学校へ行つた者いうたら、稀に見るもんで、百人に一人もおらん。高等二年まで進んだ子もあるけど、六年生で卒業して、貧しさのために親といつしよに仕事に行つたという者が大半ですわ。高等二年を卒業できたら、ええ方ですわ、もうそれは……。一般地区の子どもは全部高等二年を卒業するし、十人中一人は旧制中学校へ進んでますね。

だから、今考えてみると、学校の先生方も「同和」地区の「えった」の部落の子にたいしては、あまり教養をつけるとか勉強をようさせようともしとらんやね。勉強中に自分らが分からんもんだから外へ行つて遊んどつたれと遊んどつても、先生はそれでも怒れしまへんだ。「ああ、あれは（どこそこの）子やでなあ」ということやつた。

——教室をぬけ出して、運動場なんかで遊んでおつても、何も注意しなかつたんですか。

西田 ええ。勉強なんてしとらないですわ。ただもう給食を腹一杯食うて、やんちゃしたいだけですわ。だか

ら、教室ぬけ出しておつても……というのは、教室へ入るでしょう。一般地区の子を見たら、机の上に消しゴムはある、鉛筆はある、全部揃うとるんでしよう。自分らは鉛筆はまあなんとかがあとかあるけど、ナイフはあるとも、消しゴムはあるともいえん。鉛筆が折れたら、削りもできへん。ナイフを貸してくれ言うても、貸してくれん。だから、勉強がいやになる。放つといてポツと出て行つても、先生は怒りもせえへん。「ああ、おまえ、(どこそこ)子かあ」と、こういうことですわ。その当時、もつと勉強して伸びようという野心もまあなかったけど、伸ばしてやらんならんといい気持ちには先生にもなかった。自分らはあまりにも哀れでね、他所の子は図画の時間には木炭紙を持っているわ。一銭で二枚買えたんかなあ？ 朝出る時に、今日は図画があるんやからあれを買うのに「金くれ」言うたら、親はくれやらへんだ。「あ、そんなもの、そんな時に習わんでもええ」と言うてね。

というのは、米を買うたりせんならんし、こつちも無理やり親に頼もうとも思わんし、だから気に入らん時は学校を休んだりしてましたな。行ったところで、隣りを見たらちゃんと写生の道具を持つとるし、自分らは鉛筆だけですわ。鉛筆をこう、子どもの時にはなめてね、

力を入れて書くもんだから、折れたら、それでもう仕舞いですわ。小刀いうとりましたけど「ナイフ貸してくれ」言うたつて、貸してもくれへんだわ。肥後守いうて、他所の子はよう自慢しよつたわな。「こらッ、おまえら、こんな良えやつ無かろうがい」と言うてね。よう切れよつたわいな。それ貸してくれと言うたつて、貸してくれるかいな。だから、鉛筆が折れてしもうたら、もう勉強しよらん。帰つて、野菜包丁で削つてね、明るる日にまた学校へ持つて行きよつたわい。だから、鉛筆でも、他所の子の持つてるのはこんなに長いのに、ぼくらが持つてるのはこんな短いもんや。持つのにもう持ちにくいですよ。そんなもんでした。

——それは鉛筆一本だけしかない状態でしたのか。

西田 はい。折れたら終わりやつた。部落でも、ほかの子はどうだったか知らんけど、少くともぼくはそうでした。消しゴムがないので、ツバで消すと、穴が開いてしもうてね。手そのものが汚れていますやろ。それでやるもんだから……。鉛筆の字でもナイフできれいに削つて書くときれいに書けるけど、折れたやつで書くと太い字になつてしもうて、それを消やそうと思つたら、紙に穴が開いてしもうたわ。

しかし、不思議なもんで、自分らは親から「おまえら

はこうなんじやから、気をつけなあかんでえ」と教えを受けていなかったから、別にその抵抗はなかったけどね、侮られたとか……。少し大きくなって、二、三年経った時に分かりましたわ。

当時の差別は悲惨でした

——大きくなってというのは、尋常高等小学校を卒業してからの話ですか。

西田 ぼくは高等二年までよう行かんと、一年で止めてしまうたけどね。そしたら、もうどこへも行くところがない。親の後について土方へ行くだけですわ。その土方に行くのはええんですわ、麦ご飯にしてもなんでも腹一杯食えるでしょう。当時、柳行李いうて、小さなフタをする弁当箱がありました。それに、麦ご飯いうてもほとんど麦ばかりのご飯やっただけど、一杯つめてね。麦ご飯は消化が良くて、すぐ腹が減ったな。土方に行きだしてから、教えられたわけではないけど、段々と村の風習が分かってね。ああ、そうか。学校に行つとる時に、「ええたあ、えったったあ」とあいづらから言われたのは、むしろが穢多村のもんやっただんで、それを名指して言ううったんやと分かりましたね。

そうになると、一般地区の同級生がええところへ就職し



たり、旧制の中学校へ行ったりしとりますけど、今度は道で出会ったりしましても、相手は物も言わへん。やっぱり自分らがあいつらに差別されとるんやと感づきはじめたど相手が気づいたら、なんとかがあとか上手言っ逃げようとなりますわ。自分らはいじめられるところがあさかいに、何かあつたら、おのれやつたるぞという気持ちは確かに持つとりましたしね。だから、向こうは逃げよう、逃げようとする。何かがあれば、いじめられたとか、どつかれたとか言うんでせ。向こうさんはやっぱり親に言ううったんやね。だから明るる日に、何のいわれもないのに警察が出て来て、「おまえら、あの某君の家の前で何しよったんや。柿をもいどつたんか、物を盗りよつたんか」と、家に三回も四回も来たことがある。こつちには、なんのいわれもないんです。悪い事を全然しとらん。しかし、小さい時に自分らが差別的なことを

されとつたのが、自分らがあとからそのことに気づきだすと、相手はこつちに復しゅうしたるいう気持ちがあるんやないかと、怖いという目で見とるんやね。それで、自分らがたまたまその家の前を通つて、庭に柿の実が生つところを眺めとつただけで、結局「あいつは柿を盗りに来とつた」なにを盗りに来とつた」とか言うて、警察へ訴えとるわけですね。何んでもないのに、三回も四回も警察からコテンコテンにやられたことがあります。当時の差別というのは悲惨なもので、えげつないものでしたわ。家を一步出ると、もう差別が待つとつたみたい。差別ということに多少ものを考えるようになってからは、自分らの目から見ると、相手は逃げとつたですわね。向こうの方が先に知つとるからね。「あッ、西田のやつ、知つたな。知つたら、今後なにかの形で復しゅうするんかも分からんぞ」と、向こうに怖さというもんがあったんでしよう。だから、その家の付近を通つただけでも、物を盗りに来とつた、柿を盗りに来とつたと警察へ言うとつたからね。それはもう残念でしたわ。そんなもん、物を盗りに行つたんでもなんでもないのね。「ネギ引いて持つて行つた」とか、夏だと畠にナンバキビいうて生つとりますけど「あんなもんでもいいで帰つた」とか、警察へずうつと言うて行つとつた。わしはよく「納座の

部落（一般地区）でまた何悪いことしとつたんや」と怒られよつたけど、何も悪いことしとらん。そこを通つただけでね。もう、差別の悲惨さいうたら、一步外へ出たら、その当時は特にひどかつたな。

尾崎 西田さん、今あなたがおっしゃるように、一般地区の子どもは小学校一年生の時から、「（どこそこは）穢多部落で、わたくしたちとはいっしょに同席してはならん。そして、おまえらの方が上や」と、その根源を何も教えられんと、「穢多である」「差別される村である」と、親から教えられとるやろうがあ。親からそう教えられた中で、六年間、八年間と学校生活しとるで、学校を卒業してから、少し物事が分かりだすと、あなたが言うたように、「怖い」という気持ちを持つようになるんや違うかな。今度、その「怖い」のを、どういう方法で押さえこもうかといえは、国家権力の警察にいうとか、あるいは部落の区長さんというとか……そういう権力のソデにすがつて、部落をやっちゃろうとするもんや。今でもその繰り返しや。歴史を考えてみても、そういうように（一般地区の人たちは）持つて行つとるわ。

西田 先生でも部落外の子どもは怒らなんだ。なにかすると、自分らが怒られてね。一般地区の子らにやられるんやから、その子らにもつと何かしたらええもんを、

その当時は、われわれの方が怒られてね。先生の観念として「同和部落のもんは何やつても悪いし……」という偏見があるからね。箱の中へ入れられてな、「もう、おまえ、ここから出さへん」と、何回やられていますやろ。だから、勉強がしまいにはいやになつてしまふ。勉強がいやになつて、学校でサボるだけじゃなしに、今度家から出んのですわ。学校へ行くのが嫌になつてしまつて……。行けば、他所の子は筆箱持つて、その中に鉛筆はある、ナイフはある、消しゴムはあるわ。自分らはそれがなかつたからね。自分らは風呂敷に包んで行きよつたからね。カバンも持つてないし、ランドセルも何にもあらしまへんのでね。運動靴はいとるわけやない、草履はいて行きよつたんや。一般地区の人も草履はいとつたけど、それ破れたら、「ああ、また（どこそこ）へ行って買つて来たらええ」と言いよつたでえね。子どもらにいたるまで、徹底してこの部落の人間は怖い、恐ろしい、劣つとると、それだけを教えこんどるからね。

大垣 親が子どもに「ヨツツ」「エツタ」ということばを教えとることは間違いないな。

尾崎 しかも、この部落の人間をそういう目で見たわな。「わしの方が先に知つとるんや。おまえたちは知らんのやろうが。わしはうちのおとうさんやおかあさん

から聞いて知つとるんやぞ」と、そのことを知つて、知らない子どもに教えることで、他地区の子どもはリーダーになつたような思いがあつたんやね。知つとることで英雄みたいな気取りになつて、ちよつと口のまわる子や頭のすばしい子らは、差別をどんどん広めて行つたんやな。わたしらの部落の生徒と対応した場合には、この人間を差別することによつて、自分は英雄気取りみたいな気持ちになつたり、またリーダーになつた気持ちになつたりして、そりやあ、いろいろの使い分けで差別しよつたよ。

西田 今から四十五年ほど前のことになりまして、わたくしが十四歳でしたわ。この奥に納座という部落（一般地区）があるんです。そのの、昔でいう庄屋へ、うちの親父が麦刈りを頼まれとつて、「おまえも行くか」と連れて行つてもらつたんですわ。そうすると、今思い出すと、腹が立つんや。昼になつてな、昼食のおりに、まあ縁側に座らせてくれたわな。そして、自分らはあまりええことないけど弁当を持つて行つとつてな。向こうはお茶をくれたんですよ。くれるんですけど、こんな瀬戸物の茶碗じゃなしに、木のお椀でね。障子も開けずに、障子の破れたところから手を出して、「おいしよ、お茶飲みなよ」とくれよつた。障子のこんな小さい破れたところか

短評募集!!



短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれはぜひ人にも勧めたい、あるいは、強く印象づけられた本の短評を

原稿用紙(四〇百字詰)二、三枚に。

☆ジャンルは自由、締切は毎月末。

☆詳細は、61ページの「お知らせ」をご覧ください。

●あて先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合「書評」編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線4821)

ら「お茶飲みなよ」とくれよった。

——木の欠けたようなお椀にお茶を入れてくれたんですか。

西田 はあ。縁のちよつと欠けたお椀にお茶を入れてね。

そして、それがお茶かというたら、お茶じゃないんですよ、白湯ですよ。それを障子の破れたところから、障子戸も開けずに……開けてやった方がぼくはええと思うんですよ。そこから「お茶飲みよ、お茶飲みよ」とくれよったのを、今ふつと思ひ出したわ。しかし、当時はいくら腹立ててみても、旧中川村十一カ村の中で、部落はここだけですからね。だから、部落全体に経済力がないのと、それと大した知恵者がいないのとで、比較してみる

と、すべての面で落ちこんでいましたわ。

——大垣さんは、小学校の時の思い出がなにかありますか。お二人とちよつと年代が違いますが……。

大垣 わたしらの時には、そういうことはなかったんですけど、昭和十七年の大東亜戦争の真最中に、こういうことがありました。それが柚子(ユズ)の生る頃やから、十月やな。わたしらは六年生の時から山へ入って、炭焼きばかりしてりました。そしたら、さつき話に出たこの奥の納座の、阿保角さん(音読み)というて……この人はなんでも屋さんで、うちの村へも物売りに来とつた。その時に柚子を持ってこの村へ来たんや。その柚子

を四つ四銭で売つたらしいんですわ。わたしらはそれを
買っているんじゃないのな、詳しいことは知らんけど
……そしたら、明くる日に山へ行つて仕事しとつたら、
その村の子が同級生におつてな、その子が柚子持つと
つて食うていたもんで、「さあちゃん、柚子くれや」と言
うと、「あかんよお、おれ。(どこそこの)エタやつたら、
柚子四つ四銭でおとうちゃんが売れるいうとるさかいに
あかん」と言うたんや。四つ四銭、四つ四銭と……

西田 そうそう、そういうことばをよう使いよつた。

——それは納座の方から柚子を売りに来とる家の子ども
ですか。

大垣 その子どもですわ。そうしたら、腹が立つもんじ
やから、わたしはちようどこの地区の班長しとつたも
んやから、先生とところへずうつと山を降りて言いに言つ
たんです。「先生、こないこないで、さあちゃんが柚子を
四つ四銭で(どこそこで)売れるというけど、四つ四銭
で買うたら悪いんかい？」と、わしは先生に聞いたんで
す。そしたら、先生は仕事しとつたのが、そこへ土下座
して、サアツと座つてしもうてな。それから「堪えてく
れ」と先生が謝つた。わたしはこうやつて立つとつてな、
「堪えてくれつて、先生、こないなんや」と。わたしはま
だ四つ四銭の意味が分からんだ。それから、うちの村か

ら来とる同級生が四人おつてな、それに聞いたたら、石本
君が知つとつてなあ。「ヨツツ言われると、うちのこと
を言われとるんや」「今から帰つて、青年に言おう」と、
こないなことだね。山へ弁当を取りに戻つてから、青年
に言うたんや。青年がその日のうちに会議して、大谷先
生を呼んで来て、まあ糾弾ですな。

青年が闘いの中心を担つた

西田 青年、青年ということばが出ますけど、この部落
は代々青年が中心になつて、勢力を持つとつたからね。
ずうつと続けて小さい子を勞り、あるいは年寄りが何か
をするにつけても、手伝いよつた。わが子が言うことを
聞かんとときには、親が「青年を呼んでくるぞ」と言うた
ら、言うことを聞きよりました。青年がすべての面で大
將になつてやりよりましたから、代々青年団が引きつが
れてきとつた。だから、これはおかしいこつちやなと思
うたら、帰つて青年に言うということばがこころあたり
から出て来たんやね。

大垣 それで、一カ月ほどもめましたわ。昭和十七年ご
ろのことですわ。「もう兵隊なんかに行かせん。今行つと
る者も戻せ」というところまで行きました。校長先生か
ら、警察署長からみな来て、「こういうことは二度と起こ

させんから……」と、書き証文を取ったんやろう。

——その担任の先生を呼んできたのは、自分の担任している子どもがそういうことを言ったから呼んできたわけですね。

大垣 そうです。結局先生の責任になるからね。

西田 青年団の耳に入れば、指導者はすぐに相手呼びますからね。

大垣 その親も呼ばれてここの部落へ来よったわな。校長先生が帰らしてもらへん日もありましたわな。

西田 納座の角さんという親父は自分とこの家で食べてね、食べ残したら「ああ、どこそこの」部落に持って行ったら売れるんじゃないか」と言っていました。またこの村の人も買ひよったんですね。いくらかでも金になつたらええわけですからね。

尾崎 今あんたちが話したことを分析してみるとね。いずれの時代でも、何百年も前から、村の中堅として、若い青年がいずれの差別の事態が起きて、年寄りを守り、子どもを守って、部落を守るといふ気持ちに燃えつつたんやね。それいふのは、今からもう何百年も昔のことでしょう。この村の川下に、和田山町の久世田というところがあって、その田んぼの中に森がとお宮がありますやろ。あの宮の植木がチラッ、チラッとしか見え

んような大きな水が出たらしいな。わたしらが先祖から聞いたものに……。その時分に、^糶種も麦種も一切この村にはなかつたと。ほかの地区もなかつたにしても、ほかの地区の人は親戚が多いからね。播州とかどことか、水の被害のない所に親戚を持つとるから、どつこからでも種を持ってきてまいたけど、さてこの村には麦種がないということになってやな。秋になって、米はちつとも無いようになるし、麦の種もおそらく食つてしまつて無

い。

その時に、若い人がもう食うや食わずで、京都の向こうの、今でいうと滋賀県の方までやな、昔の江州やな、あの辺まで歩いて行つて、麦種を乞食のように、乞食して回つて、麦種をもらつて来て、この村にまた麦種をまいたという言い伝えがあるんやぞ。やはり、その時代、その世代において、苦しい時でも、どんな闘いでも、村の中心になつて、若い青年が闘こつてきた。そして生命を守つてきたというのが、さつき出た「青年に言う」たら、差別のこともなんでも、青年がしてくれるんやという流れになつとつたんやないかと思うんや。麦種を一軒一軒歩いて、乞食して回つて、もらつて来たという言い伝えがあるがな。うちの隠居らは八十四歳で亡くなつたけど、その私の親の親がそう言つて話しとつたから、

相当古い話やでえ。その人が「麦種を求めて、乞食して回ったんやでえ」と、そないに話しよったわいな。この近所では、麦一合も、三合も助けたらうという者がなかつたというやがあ。

そういうところにも、きつい差別がなあ……。もう命を絶たんばっかりの土壇場になつても、それこそ麦一合の種も手を差しのべてくれる者がなかつたということやな。ようもその中をな、われわれのような現在生きとる人間をよう残してくれたもんやと思う時もある。人間の命の強さ、生きる力の強さいうものを感じるな。いろいろな苦しい闘いをおしても、この村に生き残つとるいうか、よう生き残つたもんやなあと思う。

西田 やはり考えてみると、権力が差別を作つたということがよう分かるわね。

大垣 そうやね。

——さっきの話だけど、学校で差別があつたら、青年に言うて来いということは、親や青年から聞いたつたんやろうか。

大垣 親に言うより、なんでも困つたことがあつたら、青年に言いよつたでえな。

尾崎 差別の中で新しいひとつの闘いを起こすとか、それから村が苦境に陥つた時とか、あるいは生徒や子ども

が困つた時なんか、親から教わつてないのに、そういう流れになつて部落が構成されていたように思うな。青年も言うて来いと言うた憶えはないけど、やはり一番頼りになるのは、青年しかいないということやつたな。

西田 自分らもずうつと上がつてきて、青年になつた時に、よう分かつたわな。勢力があつたのは青年やつた。というのは、十六歳ぐらいから、二十一、二歳までの青年が一番勢力もあり、すべての面にも理解があり、差別を見抜く力を持っていたな。親から聞いたんではないけど、一般地区から差別的なことをされたのをみな持ち寄つて、その集いの中で、こういうことを受けたということ、「ふん、これは差別や」と、差別を見抜く力が強かつたですな。自分らも子どもから段々と青年になつて、これは差別だつとよう分かるようになりました。だから、青年が中心になつて闘うし、すべての中心者であつたね。それは誰いうとなしに、年々増つとるんですな。

大垣 しかし、まだ現在でも差別的なことや差別発言はなんぼでもあるな。

西田 お聞きになつたと思うんですけど、山田久差別文書事件（一九七四年）の糾弾闘争がとられた時に、神谷隆満という関係者がこの町に住んどるんですわ。その確認会が朝来町の体育館でやつたおりに、わたしはこ

の支部の書記長をとりましてね、会場に行つとったんです。神崎が開口一番に言つたことは、「既成的觀念として自分たちには残つとる。差別自体も既成的觀念の中にある」と答えて、相当きびしい糾弾を受けましたけどね。というのは、オギャツと生まれた時に、おまえらは部落であり、わしらはおまえらと違ふといふことは決まつとるんだというようなことを言つて、相当きびしい糾弾を受けましたね。その当時、まだ南但の地方で確認会とか糾弾会とかは初歩的な段階でしたので、もうひとつきびしく追究できにくかつたけど、丸尾（良昭）君を中心とする青年行動隊が結成されてね。それから青年行動隊



が中心になつて運動を盛り上げて行きましたね。

——山田久差別文書事件が起こるまでは、差別にたいして部落の人たちはどのように考え、運動していたんやうかね。

西田 差別にはたしかに腹が立つし、それが差別だと分かつていても、自分らの時代では、生活の苦しさや、自分自身が一般地区から余りにもえげつない、寂しい立場に置かれておるから、強い糾弾とか確認とかの体勢は取れなかつた。まあ、泣き泣き堪えよう、泣き泣き堪えるより仕方がないと思つたな。というのは、経済力がないからね。一日遊んでこの事件を徹底的にやるといふ経済力がないからね。遊んだら、誰も生活をみてくれしまへんしね。だから泣き泣き堪えてきよつたということが権力にこういつた強い力を植えつけてしまつたと思ひますわ。

しかし、南但馬では丸尾君をリーダーにして青年行動隊が結成されたりして、その頃からばくらも解放運動に取り組んできたんです。まあ、そうして寝とつた子が目をさましてきたわけですね。それは青年行動隊を中心とした運動の大きな成果だと思ひますわ。

父親は草履売りに回っていた

——話ばかりと変わるんですけど、みんなのおとうさん、おかあさんはどういう仕事をしていたんでしょか。どんな仕事をして、あるいは仕事がなかったのか、どんな生活をしてたのか話してくれますか。

西田 はいはい。わたしが子どもながらに憶えているのに、うちの親父は若い時分に日露戦争に行つとつたそうです。その頃は建設仕事といつたつて、今のようにコンクリート打ちがあるわけやなし、河川では、松の木を切つて来て、そいつに穴を開けてボルトで締めて、柵を組んで、その中に土砂や石を入れて、提防を築いたりした。昔の土方いうと、そんなもんですわ。その土砂を運ぶのにモッコという、こう四角に編んだ道具が要るんですが、そういうものを家で作つたりしていたんです。それに今みたいに長靴のない時で、ワラジをはいて仕事をしよつたもんですから、ワラジを作つたりしてました。それを一般地区へ売りに行きよつたんです。だから、仕事がどんどんできれば、他所の人は雨が降つても土方仕事に行くから、むしろ他所の方がよう売れるんですわ。この地区の人はめいめいに仕事しとつて、山へ行く者は山へ行く、川に行く者は川に行くという具合でね。他所

の人は、そもそも業者の親方が他所の人ですから、一般地区の人が大勢働きに出とるわけです。この村には、悲しいかな、業者が一人か二人しかおらん。だから、部落全体の入夫を雇う資力も仕事もなかったわけです。それで、山に行つて紙を作る原料の雁皮を採つたり、染料になるフシを採つてきたり、それから山から薪を取つてきて一般地区へ売りつけるとか、そういう生活だったのです。

うちの親父は多少商売気があつたのか、売れるというところに目をつけて、草履やワラジをどんだん村の人に作らせてね。今だつたら、内職になるんでしょうけど、当時だつたら、それが主職ですわ。そのワラ仕事で生活を支えとつたわけです。草履やワラジを、うちの親父が買い集めて、天秤棒にかついで、売りに行きよつた。そういう生活の村でした。自分らも、あの家に行つたら、草履がようけ出来とるさかいに、取つてこいよ」と言われて、子どもの頃によう取りに行つた。それをちゃんとして親父に渡したら、親父はあくる日朝五時から家を出たのを今でも憶えております。一日中かかつて売つてきて、晩八時頃にならんと、帰つてこんかつた。

いっつも、天秤棒が空になつて、帰つてきてね、後にこんな風呂敷包みがブラリブラリしとつたらね、子ども

ながらにうれしかったですわ。ということとは、それが米になり、麦になつとるわけですわ、見返りとして……。

そして、わたしは特に親父が目に入れて大事にしとつてくれたんで、「おとうさん、お帰りッ」と言つて、ジユバン着とつた頃やさかいに、ここの胸のところがふくらんだるかふくらんだらんか、すぐ見に行つたね。「おとうさん、お帰りッ」と言つて、すぐ抱きついて、この懐を見よつたですわ。そしたら、そこに、おかしいもんですわ、まあ、その季節、季節の菓子いうたらなんですけど、菓子でもなんでも買ったもんやない、もらつたもんがあるんですわ。「おまえも子どもおるんじやろ。これを持って行つてやらんか」言つて、要するに食べ残りみたいなものをもうとるわけですわ。こころでいうたら、柿だとか、イチジクだとか、ああいう食べ残りたいなものももらつとるわけですわ。だからここの胸のところかふくらんでると、喜びよつた。それと、天秤棒かついどる、後の風呂敷包みがブラブラ揺れとつたら子どもながらにうれしかった。そんな悲惨な生活でしたよ。

どの家庭をみても、土方に行つて生活をしとるか、あるいは山へい로운金になるものを採りに行つて生計をしとるか、ワラ細工をしとるかでしたな。

部落はいつも分の悪い仕事ばかり

尾崎 ワラ細工をしとるのが八〇%でしたね。木びきいうて、大きなノコギリで板を引いたりなんかする仕事には行つてない。それは一般地区の人の仕事。部落の人は木びきには行けなんだんじや。山で大きな木を伐採してソリに乗せて出すのも、一般地区の人がやつとつた。そういう人たちは、今、西田さんが言うたように、草履とかワラジとか毎日ようけ要るさかいに、それで売りに行きよつたと。それに、土方にしても、昔はわたくしらの村もようけ仕事に出とつたけど、今は土建業者にしても大きな資本が要るから、他地区がみんな大きな業者になつてやつとる。農閑期になると、他地区の人はみんな土木に出る。昔のように、土木だけは解放しとらん部落の人間の職業やと残してくれとつたら、その収入はごつついよ。

ところが、職業の差別はないんやから、金になるものはみんな他地区の人が取つてしまふ。昔はこの村でもごつて牛がいうんか、大きなオス牛を飼うていたそうや。大きな地主が代官所に年貢なんかを納めるのに運ぶでしよう、そういう運搬業を昔はしとつたという話です。大きな牛の鞍に鈴をつけて、チャラン、チャラン、チャラン

チャンさせながら、代官所なんかへの年具運びをしとつた。今でいうたら運送屋やね、そういう仕事もしよつた。それも、大きな馬を買うて、後に荷車をつけて運ぶようになったら、資金がないから、他地区の人にその運搬業も取られてしもうた。こういう差別を受けとる村独特の生活力につながる職業があつたんやけど、それが明治の時代になり、大正になり、現在になつてきたら、この村に昔から定着しとつた職業さえも、段々と他地区に移つてしもうて、この村にはないんです。資本を持つている者がどんどん成功していつてね。

西田 自分らが昭和七年ごろいうと、十歳ぐらいの頃ですわな。満州事変の起こつた当時でも、この部落の仕事は土方しかないわけ。わたしは自分の親のことでよく知つとるけど、土方の工事現場まで、ここから歩いて一里半ほど（六キロ）あるんですけど、うちの親父なんかは朝五時半ごろに歩いて仕事に行きよりました。当時、直令[〃]いうて、個人の仕事やなしに、今でいうたら建設省の仕事みたいなもんに行つとつた。それが毎日あるかいうたら、毎日あるわけではないんですわ。なにしろ、仕事が小さいところへ大勢の人が働くんですから、一カ月に二週間働けばええ方。「おとうさん、なんでそんなに早よう行くんや」と聞くと、「早よう行かなんだら、自転車

はないし……、早よう行つて火でも焚いておくと、親方が機嫌ようしてくれるから……親方のご機嫌の悪い時に明日から休め言われてもしようがないので……」と言うとりましたわ。親方に明日は休めと言われる時があるで、ある程度べんちやらをしないと、二週間働くところを三週間も働こう思つたら、それくらいにせなんだらあかんのやと、雪道をワラジはいて歩きよつたのを憶えておりますわ。

行つてどんな仕事をするんかと言つたら、一般地区の人は当時もう地下足袋をはいておつてね。うちの親父なんか、その地下足袋を買う金がありませんよ。その当時、一日の日当は子どもながらに憶えておりますけど、三十五錢ぐらいでした。それが朝五時半に家を出てね、昔の人は足が強くてよう歩きよつたら、一里半いうたら三十分もかからんぐらいやつた。六時には向こうに着いてつて、火焚いて待つとつて、六時半には作業開始ですわ。

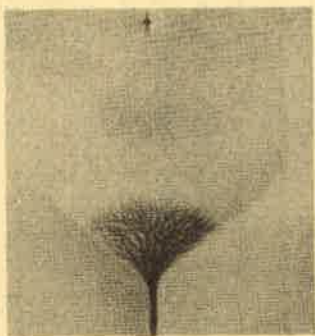
尾崎 あんたは行つたことない？

西田 わしは行つたことがない。

尾崎 わしは行つたでえ。そして、道具代を一日に四錢引かれてえ。

西田 道具代を四錢引かれて……一般地区の人は行く時に自分ところにあるようなツルハシだとか、ジョレンだ

書評編集委員 募集 !!



『書評』を自分の手で
創ってみませんか？

☆雑誌の編集に興味のある方。

☆思想・文化運動をやってみたいと思う方。

☆お気軽に編集委員まで。

●連絡先 生協本館3F・組織部内

☎38719998 (直通)

☎38811121 (内線4821)

とか、道具を持って行くんでね。こっちはなんにもあらへんので、身体だけで行くから、道具代を四銭引かれた。この村がただ立ち遅れとるのが、差別によって立ち遅れさせられとるのか、今になって分かるんですけどね。経済力がなかったたので、部落に事業家がいなかったのと、大勢の労働者がおるからひとつの仕事にまとまって行けないので、山へ行く者は山へ行く、川へ行く者は川へ行く、それぞれバラバラの仕事でしたね。直令の仕事というたつて、二カ月もしたら済んでしまうからね。土方、土方というけれど、その土方が一年に何カ月あったか、おそらく二カ月もあらへんだ。一般地区の人は農業で働

けるけど、ここの部落の人は悲しいかな、田んぼがなかったから、二カ月か三カ月役場から直接に賃金を払ってもらえるような仕事があるだけで、それ以外は個人で山へ雁皮採りに行くとか、フシを採りに行くとか、薪を取って来て売るより仕方がなかった。わたしらも学校をあげたら、山で木こりばかりですわ。その木をどないするのかいうたら、冬に焚き火にしてあたってしまいか、風呂に焚いてしまいか、それより楽しみがないんですから……朝起きたら、「山へ行ってこいよう」と、木を持って帰ってくる、それが仕事ですわ。金もうけはまずなかった。

尾崎 仕事なかつたしなあ。金もうけはなかつた。今考えてみると、その当時の生活でよくも生き延びたなと思ふね、仕事がなかつたから……。そりゃあ、お弁当でもどんなお弁当だったか。どんなまぜいお弁当でも持つて行ける所があつたら上々やつた。

西田 一般地区の人は農閑期に「直令」仕事に行くといつたら、お顔がええからすぐ採用ですわ。ここの部落の人は恥ずかしい話ですけど、山へ行つて兎を捕つてくるとか、鹿を捕つてくるとか、猪を捕つてくるとかしていたけど、そういうところのええ肉を持つて行つて、やつと就職したと思つたら、一カ月経たないうちに仕事が済んでしまふ。あるいはくびになるという状態でした。わしもよう生きながらえてきたと思つた。

——土方の仕事もない時に、男の人もワラ草履を作つたりとか、何をやつとつたんやろうね。

尾崎 まあね、恥ずかしい話やけど、自分の家内が草履作るところにおつて、ウダウダ話をしたり……。もう仕事がなかつた。

西田 ワラを打つたり、水をうつてワラを打つ力の要る仕事とかして手伝う程度のもん。仕事のない時は何しとつたんかという、多少なりとも「開き」いうて、田んぼがあつたからその野良仕事をして、あとは仕事がない

から遊んどつたわけや。ワラ細工も、そんなに年がら年中一般地区へ行つても買つてもらえるもんじやないし、どんどんやると、生産過剰になつて、持つて行つた品物が買いたたかれると。わたしが今なお目の中に刻み込まれているのは、親父が朝五時ごろに天秤棒で肩がしわるほど担いで行つてね、夜八時ごろ暗ろうなつてから帰つてくるんですわ。何遍もいうようですけど、天秤棒の後にこれくらいの風呂敷包みが揺れとつたら、うれしかつたですわ。それが食べ物であり、麦であり、米でありね。自分ところはちよつとは田んぼを作つとるんですけど、家族が多いのでとても足りない。

尾崎 草履やワラジを売りに行つても、全部が全部お金とかお米にして替えることはできん。その半分なり三分の一で、今度はワラをわけてもうて帰つてこんと、ワラそのものがないんやからね。それで、とことんまで生活は追いつめられておつたな。よう生きたもんやと思う。第一、ワラがないもの。全部が全部売つたものを、どんなにまぜいもんにでも替えて持つて帰れたら十分ですけど、材料のワラを買つてこないし仕様がな。そうなつてくると、一般地区の人は高いところへとまるといふほど高いところへとまるといふ。地位とか態度がお高いところにとまるんやね。そしたら、どんなもんを売り

に行っても、麦刈りに働かしてもらうても、こちらは姿勢の低いこと、これ以上姿勢が低うできんところまで行かんと、生活できなんだんや。

西田 この部落は特にそうですよ。当時、中川村というて、十一カ村のなかの一カ村で、朝来町という大きな町になつても、部落はここだけですわ。周囲は全部きびしかったわな。逆に考えて、品物をようけ持つて行つたら、一般地区の人が多いんやから、ようけ売れるやろうかというのと、そうじゃないんです。ワラジ作つても、草履作つても、その原料のワラは品物と交換して手に入れなきゃならんし、そりゃあ、大変でしたわ。

それから、今思い出したんですけど、女の人が朝から夜六時か七時ごろまで、せつせ作つて草履が二十足でしたわ。今から四十数年前のことになるけど、うちの親父が「十とく、十とく」と言つとりましたけど、十足のことでしよう。その十とくを九錢ぐらいで買うて、十四錢か十五錢で売ってくるんですわ。天秤棒になんぼ担いで行つたかというのと、百五、六十足。二百はよう持たなんだ。前に八十、後に八十、百六十ぐらいの数やつた。それを三里ぐらいの向こうまで担いで行くんですよ。もう、夜くたくたになつて帰つてきよつたですわ。

うちの母親が「おとうちゃんか帰つてきたんやから」

……と、三合徳利を持つて酒を買いに行つたもんですわ。うちの親父はあんまり飲まなんだ方ですけど、三合も酒をかうようなことはまずないんやね。五勺（一合のき）買うてくるか、一合買うかですわ。入れものが三合徳利しかないから、それ持つて買いに行くけど、中味は入つたらん。そりゃあ、金のない時、うちの母親なんかでも「おまえ、行つて来い。一合買えんの、五勺買うて来い」と言いよりました。五勺のマスがありましたわ。母親でも体裁をかもうたんでしような、自分に行かせよつた。一合買う時には一人前の顔して、母親が行きよつたのに……。たしかに、そんなひつ迫した悲惨な状態でしたわ。

修学旅行には行けなんだ

尾崎 時代の流れからいうと、今七十八、九歳から八十歳以上の人間は、わたしらの母親みたいな年齢やね。他地区の人が一生懸命に養蚕をやつとつたので、その方は養蚕の桑こきに頼まれて行く、蚕を飼うのに頼まれて行く。それは、向こうに泊り込みで行きますわな、その時は蚕室の中で寝よつたらしいですな。それから、昔の人にたずねたら、みんな経験があると思うんやけど、主に福知山へんにようけ養蚕に行つとつた。それでも、待

遇をようしてもろうた者で、その家に残ったカスリをもらうて帰ったりしよった、と話によく聞くがね。とにかく、賃金をもらうために、麦刈りに雇われて行く。稲刈りに雇われて行く。稲こきをする。それから、その主人が山で木を伐採してたくさん積んでいるのを運搬するのに雇われて行ったり、畠うちをして雑草を取ったりするのに頼まれて行ったりね。主に、一番暑い盛りに畠で働かんならん。暑いさかりに一生懸命麦刈りせんならんとか、一番苦しいところの雑役にほとんどの人が出よったんではないかな。わたしらは子どもごろにそう思いましたでえ。それから、その合間は草履はつきり。定着した産業はないし、田んぼは作つとつても、ものの半年も三月も食べるだけの米はないしね。よう生きておつたなと思うな。

西田 一般地区の人の方が生活が安定しとつたし、こつちは生活が苦しいから、草履作つて買うてもらおうかいやというて、売りにまわつたんですわ。

尾崎 西田さんにそんな経験がないかなあ。わたしは自分のことを話すけども、おそらくわたしたしの学校時代に修学旅行やなんやに行つたもんはないやろう。わたしは行つたことないから、知らんぞ。あんたもそうか。ないやろう。先生が一軒一軒回つて来て、「どないぞ行かした

つてくれ」と。修学旅行に行かせてもらつたこと、ないなあ。そらあ、そうや。二十八銭や二十五銭で一升の米が買えた。十八銭で買えた時分もあつたんや。それさえも満足に買えんのに、なんで修学旅行に行かしてくれるやろ。その当時の修学旅行で、一円五十銭かな、二円までやつたと思うけど、あの伊勢参拝に行くのが……。それでも誰も行けなんだ。

西田 旅費だけなら行ける人もあつたんでしようけど、行くとなると、服買わんならんわ、運動靴買わんならんわ。むしろ、修学旅行費よりもその方が多いんでね。日常わしらは着とらんからね、服買わんならん、靴買わん



ならん、カバンは持たんならん。それで親はよう行かさんのです。わたしが小学校に入學した当時、運動靴を歩いて行つた者はこの村ではいなかつたな。ランドセルもなかつた。一般地区の子どもはみんなええランドセルを持ってましたよ。角帽みたいなものをかぶつてね。わたしは着物着て行きましたよ。草履はいて、風呂敷に包んで行きましたよ。その風呂敷もフトンの表の古いようなものを、その縁をかがつてもろうて、風呂敷にして持つて行つたもんですわ。

そして、自分の体験ですけど、差別の中をあえぎながら、十七になり十八歳になつて、あの世界に飛び込んだら、まず差別はないだろうと思つて、兵隊に志願していきましたわ。兵隊の中にもやはり差別はありました。兵隊には差別がないだろうと、所沢（埼玉県）の飛行学校に入つたけど、そこにも差別がありました。旧制の中学校を出るとるような子どもでも入学できるようなところじゃない。自分らは相当努力して入りましたけど、その中にやっぱり差別はありました。

——どんな差別があつたんですか。

西田 まあ、教官からずいぶん言われたことは、「こらッ、西田、お里が知れるぞッ」ということばで、きびしくやられました。それで、名簿の西田政夫と書いてある上に

赤丸がついてるんですよ。あとから聞いて、徹底的に追究したつたことなんですけど、役場の兵事係がわたしらが入隊する時に戸籍謄本を送るでしょう、その時にすでに「これは部落の人間や」とやつとるんですよ。わたしは十八歳で相当努力して、努力して、なんとかかかあとか人がうらやむような飛行学校に入りました。苦労しましたけど、試験でも、すべての面であの人間より優るとも劣らんと思ひよつても、やっぱり進級していつても序列が一番最後尾でしたわ。それと、こつびどくやられたのは、「お里が知れるぞッ。こらッ」と、徹底的にやられた。それに、労力的な、力仕事に回わされとつた。軍隊の中には差別があるうはずがないと思つたが、一番差別がひどかつたな。

聞き書きメモ

① 今回の聞きとり調査で話していただいた尾崎覚さん、

西田政夫さん、大垣春雄さんはいずれも兵庫県朝来郡朝来町の被差別部落に生まれた。三人とも部落解放運動を担っている現役の運動家である。また尾崎覚さんはずでに第一回目の聞き取り調査を行なったおりに、尾崎森之助さん（一九〇五年生まれ）と同席されており、この被差別部落を襲おうとした解放令反対の一揆勢を、実力で食い止めた事実などを聞かせてもらっていた。

② 今回の聞きとりは一九八一年九月五日の午後約二時間にあつて、同部落の福祉会館で行なつたものである。所沢の飛行学校で受けた西田さんの被差別体験の話につづいて、敗戦直後は米のかつき屋で生計をたてたこと、その後、高度経済成長の時代に入つて、はじめて国鉄の定期券を買つて姫路方面の土木建設現場へ出かけるようになったことや土木現場の仕事が切れずにあるようになったこと、しかし低成長時代に入った現在、仕事が再び不安定になつてきたというきびしい現実にあることなどを聞いたが、ここでは割愛した。

③ 今回の聞きとりのテープをまとめてみて、わたしが

一番感動した話は、この部落の青年が大水害のおりに滋賀の農家を一軒一軒と乞食をして回つて、秋の麦種を確保したという、この村に伝わっている昔からの言い伝えであつた。

（たみや たけし・社会学部教員）

ボードレールにおける水（その二）

山村 嘉己

1

ボードレールが流動してやまぬ水を、幾何学的な世界に切りとって《手なづける》ことにより、われわれに見事な詩的世界を提出する手並みについては前回に述べた。

今、われわれの眼前に拵がる水は《Saveur》、すなわち、野性の手なづけようのない水、つまり《海》である。

その海がボードレールにとって具体的な存在として姿をあらわしたことはそんなに数多くない。伝記的にみてもそれはたった二回に過ぎない。一度は数多い伝説的な彩にみちているが、一八四一年六月から翌年二月にわた

る南海旅行（当時詩人は二〇才であった）で実際に航海をした海であり、もう一度は生涯の怨むべき人となった義父オーピックが死に、なつかしい母と共に生活をすることのできるようになった一八五七年後のオンフルールで眺めた海（その後詩人の死ぬ六七年までかれがいつもここに住んでいたわけではない）である。それゆえ、海がボードレールの実生活で大きな意味を荷ったとは軽々しくいうことはできない。もともと、《薄汚い街という黒い海を離れて》（「悲シミサマヨウ女」）というように黒い海を離れて、海と親じていたという意味では、海はかれの意識の底で深く広く溢れていたといえるかも知れ

ない。したがって先ず誰もが引用する次のような詩が存在する。

自由な人間よ、いつだつて君は海を愛するだろう
海は君の鏡、かぎりなく拡がるその波の動きに
君はいつも自らの魂の姿を見てとる。
そして君の心はやはり劣らぬ深い深淵なのだ。

君は自分の写し絵の中に喜んで身を投げ込む
自分の眼で、自分の腕でそれを抱きしめてみる。
そして時にはこの海の手なづけぬ荒々しい嘆きの音に
君の心はまぎれもない自分の呻きを解き放とうとする
こともある。

君たちはどちらも薄暗く秘密にみちている。
「人間」よ、君の深淵の深さを測つたものはだれもない。
おお海よ、君のしまい込んだ富を知るものはだれもない、
それほど君たちはお互いの秘密を必死に守っているのだ。

そしてここにすでに数えようもない世紀が過ぎて
君たちは容赦なく、後悔することもなく戦い合った。
それほどまでに君たちは殺戮と死が好きなのだ。

おお永遠の闘争者よ、おとおずることのない兄弟よ。

(「人と海」)

この詩の題名がはじめは『自由人と海』であつたといわれるように、ここでは一般の人間と海との性格の共通性が述べられているのではなく、むしろ《自由な人間》つまり、詩人の運命を歌つたものと考えるのが妥当であろう。そして、自由な捕われぬ人間となつたこの詩人の目に見えた海は、すなわちかれの心のうちは、

実に悪魔にも似た魅惑的な海、その恐るべき單純さの中にかくも無限に変化する海、自らのうちにかつて生き、今も生き、未来も生きるであろうすべての魂の悩みも痛みも陶酔も含みこみ、それらを自らの戯れに、身こなしに、怒りと微笑に写し出そうとする海

(散文詩「すでに」)

にほかならなかつた。かくて海はボードレールにとつては、その捕えがたい平靜さのなかに、無限にゆれ動いてやまぬ運動を秘めた人間の魂そのものの写し絵として、無視しがたい大きな存在となつていたのである。『赤裸の心』からよく引用されるつぎの一節もその意味から理解



ナダール描くボードレール

されねばならない。

どうして海の眺めはこんなに限りなく、こんなに永遠に快いのだろうか。それは海が測り知れなさとという観念と、運動という観念とを同時に与えるからだ。

2

しかし、海が人間の魂の、そしてとくに自らの魂のま

ぎれもない写し絵として、ボードレールにとって魅力あるものであることはあの「人間と海」の中にも明瞭にうかがい知れるが、一方、その海がかれにとつていかに同じ得ぬ敵手であつたかも、かれはまちがひなく告白している。すなわち、ボードレールにとつての海は先ずたしかに一つの慰安としての要素を提供するものであつたにちがいない。J・P・サルトルはそれを例のボードレールの水の無機性への愛と結びつけてこう言っている。

ボードレールが海に対するこの優しさを持つているのは、それが動く金属だからである。キラキラと輝やき、近づきがたく冷ややかで、純粹でまるで物質的な動きを持たず、つぎつぎと移りゆく形式を備え、変化する何物も持たぬ変化に、ときにはあの透明度を加えて、水はこの精神の最上の映像を与える。それは精神そのものなのだ。

この詩人の精神は海という自らの写し絵を前にして、ある種の精神の「高揚」をとどめることはできない。歌われている世界が直接海とはいえないが、「高揚」のなかには海を泳ぐ人間の感情に似たものが生々と映し出さ

沼の上を飛びこえて 谷という谷を飛びこえて
山々も 森も 雲の上も 海の上までも飛びこえて
太陽をとんでその彼方へ エーテルも物ともせず
星を散りばめる暗夜のはても飛びこえて

わたしの精神よ、お前は軽やかに移動する、
そして波間に陶然とするすぐれた泳ぎ手と同じように
お前はいそいそと深い無限の中をうねり進む、
言葉にはならぬ雄々しい胸のときめきをもつて。

この薄暗の沼地をはるかに超えてお前は飛び去れ、
高い空中でその身を浄化するのだ、
そして濁りない神聖な水を飲みほすように
すき通る空間をみたくす明るい火を飲み込むのだ。

霧に包まれた存在に重苦しくのしかかる
この倦怠やかぎりない苦しみなどは物かは
光りにみちた清らかな世界を目ざし、
逞しい羽で飛びうるもの何と倅せなごとかか。

明け方 ひばりのように 空に向つて
自らの思いを自由に羽ばたかせうる人の倅わせ

—— 人生の上を飛びかい 何の苦勞もなく

花や物言わぬものたちの言葉を理解する人の倅わせ。

この思いはしばしば引用される「髪」の中でも、官能
にみちた精神の遊泳として展開されている。

他の人たちの精神が音楽の上をただよい流れるように
おお恋人よ、ぼくの精神は君の香りの上を泳ぎ渡る。

要するにボードレルにとつては、海は先ず自らの精
神世界を写し出す、静かな《手なづけうる》鏡のような
世界であつたのだ。

（さらに先にも紹介したジャツキエールはバシユラ
ールの『水と夢』からボナバルト夫人の「海とはすべて
の男性にとつて、母のもつとも偉大にして、もつとも恒
常的な象徴の一つだ」ということばを紹介し、これらの
詩には《心しづまる *bouissement*》への願望があり、人
が泳ぎ渡る香りの海はふしぎなほど、あの母の懷に抱か
れた特権的な時間に似ていると指摘している。すなわち
海の中にはとくに男性のつきせぬ母への思慕がたゆたつ
ていることを問題にしているのだ。もつともこの母の胎
内への回帰の問題は P・エマニュエルの『ボードレル』

でも大きなテーマとして扱われており、ここには自らの始源にもどつて憩おうとする人間の基本願望と、同時にこの薄暗い世界への無意識の恐怖とが交錯していることが指摘されている)

3

ボードレールの海はその静かな表面を見つめるかぎり、ある種の静謐さをかれに与えた。しかし「人間と海」が適確にとらえているように、海はまたかれにとつてしたたかなライヴアルに違いなかつた。いやもつとはげしい恐怖をかれに与えるものであつた。恐らく生涯に一度の、しかも強いられた南海への航海は、ときにかれの中に想い出に彩られた懐しい佳篇を生み出させた(たとえば、「髪」「異国の香り」など)としても、基本的には海のもつ底ひない恐しさを身にしみ込ませたにちがいない。《souffle》(深淵)という言葉が海を扱うときほとんどきまつてかれの筆にあらわれることはその何よりの証拠であらう。とくに「阿保鳥」はその代表の一つだ。

船人たちは何度か 退窟をまぎらそうと

「阿保鳥をひつとらえる 巨大な海鳥だ

いとわしい海の上をすべるように走る船を

けだるい道づれの風情でつけてくる鳥だ

甲板の上にはうり出されるやいなや

この大空の王者は 何と無器用に 恥さらしに

大きなまっ白なその羽を いかにも不様に

その両脇に引きずつてみせる まるで權のように

この空の旅行者の何ときこちなく無気力なことか
かつてあんなに美しかつた鳥がこんなにも滑稽で醜い
とは



オンクルールの海

ある男はパイプでその嘴をつつきさがし、またある男は……空をもとんだこの不具者をびっこをひいて真似をする。

「詩人」も似たものだ　この雲の上の王子に嵐を恐れず飛廻り、射手どもを嘲笑ったこともある。しかし地上に放り出されてやじ馬の中に身をおけばその巨大な翼も歩く邪魔になるばかりだ。

この詩はその比喩の平凡さとともに、かれの詩にあつては必ずしもすぐれたものとはいえない。しかし、ここに溢れる苦々しい感懐は、この航海の苦しさを、ひいてはそれに伴う海への忌わしい思いをあらわして余すところがない。それは「妄執」の

ぼくは君の躍動と騒音を憎む　大洋よ
ぼくの心にもそれらは見出される。打ちひしがれた男のすすり泣きとのしりに満ちたあの苦々しい笑いが
海の巨大な笑い声にも聞えてくるのだ。

にいたって隠れもなく告白される。つまり、海がその静けさの仮面を脱ぎ、はげしい内面を露呈するとき、ボ



ボードレールの自画像

ードレールはその海の中に姿をのぞかせる暗い人間の内面を恐しく認めてしまうのだ。そうだ、ボードレールにとって海が恐いのはその底ひない深さのゆえだ。その深さに秘められた無限の力のゆえなのだ。だからボードレールにとっては秘密を押し隠した海の静けさと突如としてそれを破って動き出すそのざわめきとがまんできないということになる。「Profond」(深い)という形容詞の数が、『悪の花』の全語彙の中で四十四位の頻度をし

めているというP・ギローの報告はこの言葉にかけたボードレールの関心度の高さを如実に示している。たとえ「癒しがたきもの」の中のつぎの二联に注目しよう。

「天使」、異形なものへの愛に

誘いにまれた軽率な航海者、

かれはとてつもない悪夢のただ中で

遊泳者のようにもがき苦しむ

堪えがたい苦しみだが

巨大な渦に逆つてたたかっている

暗黒の淵で旋廻しながら

狂人のように歌おうとする渦に向つて

そして、この《深み》に向つて旋廻し、下降を続けながら海がふたたび《静けさ》と《深み》をとりもどすとき——そして、その時、海はまさに《深淵》そのものとなるのだが、(ジャキエールウによればこのイメージは『悪の花』に十八回出現するという)——この深淵たる海は詩人にとって最後の終焉の地となる。つまり、かれの企てた航海の果てとなるのである。

深淵の底にとび込むことだ「天国」であれ、「地獄」であれ 構うことはない、

未知なるものの底に 新しさを見出すためならば!

「龍骨よ碎けよ、ぼくは海に死にたい」と叫んだランボーにくらべて、この詩の海のはてには何かわれわれを別の期待に誘う要素があるようにみえる。事実、ブルトンら超現実主義者たちは、この「新しさ」への旅路の果てにあの新しい現代詩の生き方を発見したという考え方もある。しかし、ジャキエールウもいうごとく、われわれはバシユラールとともにつぎのように言うべきなのだろうか。

《閉ざされた水はその胎内に死をとり込んでいる。水はその死を根源的なものとしているのだ。水は死とともにその実体において死んでいる。それゆえ、水は実体的な死なのだ》(バシユラール『水と夢』)

日本中国

ことばの来往ゆきき その18

芝 田 稔

漢字訳語について思う(4)

中国で国家事業として翻訳に手をつけたのは一八六七年、上海江南製造局が開設されてからであるが、これは清国政府の富国強兵策の一環として設けられた故もあって、その翻訳は「格致諸書」、つまり技術に関する実務、実用の類に限られていたのである。

中国が西欧思想を受け入れた最初といえば、前回この項で述べたように、一八九八年、嚴復（一八五三—一九二二）がハックスレーの『進化と倫理』を『天演論』と

題して翻訳したのに始まる。

ところが、嚴復の訳文は文章がむつかしく、古典をしっかりと読み込んでいるものでなければ「一見理解し難し」というものであった。また彼が如何に優秀な翻訳家であっても、一人の努力には限度があり、時代の要求を満たすことは不可能であった。

そこへくると、明治維新以来欧米文化・文明の受け入れに総力をあげてきた日本の翻訳事業や出版事業は、質量ともに清国に比べて一日の長があった。しかも当時の日本文は、中国の知識人にとって比較的容易に理解できる文体で書かれていたのであった。

こんな具合で、日本の新刊書籍が中国でよく読まれ、またひろく翻訳されていたことは、『新民叢報』がつぶさに伝えるところである。

吾が国当務ノ急ハ、民智ヲ開クニ如クハ莫シ、民智ヲ開クニハ訳書ニ如クハ莫シ、訳書ハ日本文ノ便捷ニ如クハ莫シ。(第二号、一九〇二年二月二三日)

つまり中国の人々の知識を啓発するためには、西欧の新しい学問を伝える訳書が第一であり、訳書といえれば日本文で書かれたものが最も手取り早い、ということ、それが国家当面の急務であるからには、中国では日本書籍からの翻訳や重訳が盛んに行われていたのも当然であろう。ここで少し道草を許していただく。

物事は過ぎれば、どこかで矛盾が生じてくるものだ。日本文の中国での翻訳事情は、どうであったのか。

今日訳界ノ混雑ハ、東文ヲ学ブニ太易ナルニ由ル。
新学ノ小生「東文典」「和文漢読法」等ノ書ヲ手ニスルヤ未ダ三日ニ及バザルニ、或ハ並且いろは四十八ノ假名未ダ識ラザルニ、亦驚愕然トシテ訳書ヲ談ス。
(第二五号、一九〇三年二月二日)

今日、中国の翻訳界が混乱に陥っているのは、日本文があまりにも容易に学べるからである。新しい学問を学んでいる若者たちは、「日本文法」や「和文漢読法」といっ

た類の書物を手にすると、三日も経たないうちにしかもイロハもろくに知らないくせに、もう喧喧囂囂と訳書のことをとやかく論ずるのだが、当時清国の「読書人」たちには、これは目ざわりの現象であつたようだ。

『新民叢報』の主筆であつた梁啓超(一八七三—一九二九)もその一人である。彼はいう。

わが国では英文英語を重視してから既に数十年、学んでこれに通じる者数千輩を下らないが、嚴又陵(嚴復の字)を除けば、誰一人としてその學術思想を中国に輸入したものはいない。……通商数十年後の今日、此事がなお東籍を読む人に頼らざるを得ないことは、これこそ中国の不幸である。(第九号『東籍月旦』一九〇二年六月六日)

こうした情勢のなかで、日本の新刊書は大いに翻訳されたことであろう。となると版權の問題が頭をもたげてくるのであつた。これも『新民叢報』の記事であるから、梁啓超側の意見だとみてよいが、八〇年前はどうであつたか。

そのころ、天野某が『東洋經濟新報』で：「日中間ニ版權ヲ定メ、凡ソ日本人著ハス所ノ書ハ、中国人ニ任意翻訳スルコトヲ許サズ」との主張を展開したのであるが、これに対し『新民叢報』はその第二号『國聞短評』(一九

○二年二月二三日)において……。

其ノ約ノ成否ハ未ダ知ル可カラズ、然レドモ吾日本
人ノ器小ナルコト、驚カザルヲ得ズ。

と反駁し、さらに言をつづけて、しつべがえしとくる。

彼日本三十年前ノ文明ハ、一点一滴トシテ中国自リ
来ラザルナシ。数千年曾テ代価無ク、以テ我国ノ書
籍ヲ翻刻シ、其ノ利ヲ食シテ今日ニ至ル。遂ニ乃チ
反哺ノ義ヲ忘ル。

これ以上の穿鑿は止めて前へ進もう。日本文からの翻
訳——その訳語はどうであったのか。二、三拾つてみよ
う。

「経済」「新民叢報」が初めて「経済」という術語を用
いたのは、同誌第十一号(一九〇二年七月五日)登載の
『論世界経済競争之大勢』からであるが、この時でさえ
「生計」欄に組込まれている。「経済」という訳語よりも
「生計」の方がまだ幅をきかせていたことが分る。これよ
り前、嚴復は Political Economy を「政術理財学」と訳
したが、日本の訳語「経済学」に対して彼は「計学」と
いう訳語を当てたのであった。

ところが「経済界」「経済問題」等と広く応用されるよ
うになると、嚴復の訳語——「計界」「計問題」ではピン
とこない。そこで『新民叢報』(梁啓超を指す)は訳語の



案として、中国古典の中から「食貨」「軽量」「貨殖」「平
準」等の語彙を拾い出し、結論として「平準学」「平準界」
「平準問題」と応用の効く「平準」に決定した。(第三号
一九〇二年二月一〇日)

これを知った嚴復は「平準」という語は Economics の
意を表わすのに十分ではない。しかもこれは漢代の官職
名である。この学名は通俗的には「理財」を用いてもよ
いが、馴雅を求めるならば「計学」の名は一日の長があ
るとし「平準」を不当とした。(第七号、一九〇二年五月
八日)

梁啓超はまた同号誌上で、井上辰九郎の『生計学史』

を紹介したが、その『例言』の中で「草創之初メハ、正名最モ難シ」と前置きして「平準学」を「生計学」に改めることを言明している。

コノ学ノ名、今尙未ダ定ラズ。本編ハ平準ノ二字ヲ向用シタルモ、未ダ安ラカナラズ。嚴氏ハ定メテ計学ト為スモ、又ソノ複用名詞ヲ嫌ヒ、頗ル不便有リ。当面生計ノ二字ヲ用ヒ、今姑ラク之ヲ用ヒ以テ後人ニ俟ツ。

かくして、『学説』欄に「中国之新民」という梁のペンネームで『生計学（即平準学）学説沿革小史』を発表している。

このように日本の「経済学」という訳語に対し、中国では、まず嚴復の「計学」、梁啓超の「平準学」「生計学」を経て遂に「経済学」に落着いたのである。

因みに「経済学」の訳語は福沢諭吉『学問のすすめ』に初見される。（二八七一、明治四年十二月同書初編）

〔社会〕Societyの日本訳語「社会」は『新民叢報』では、その第四号『學術』欄の『論中国學術思想變遷之大勢』の中で：「由於社会之變遷也」社会ノ變遷ニヨルナリ」と初めて「社会」ということばを用いたのであるが、その第十一号の『問答』欄で、一読者の質問に答えて次のように説明している。

「社会」トハ日人ノ訳語。中国デハ或ハ之ヲ訳シテ「群」ト為ス。ココデノ「社会」トハ即チ「人群」ノ義ナリ。……本報ハ或ハ「群」ノ字ヲ用ヒ、或ハ「社会」ノ字ヲ用ヒ、筆ニ随ヒテ之ク所、一二画ス能ハズ：……然レドモ「社会」ノ二字ハ、他日亦必ラス中国ニ通行スルコト疑ヒ無シ。

古来、中国で「社会」といえば、もともと土地の神を祭る行事のことで、春と秋に行われたもの。更には農村の学塾で行った節句の行事などを指しているもので、なかなか馴染めないことばであったようである。

〔金融〕これも中国では理解しにくいことばの一つであった。嚴復は『原富』の中で「金銀本値」と訳したが略称して「銀値」とも訳している。しかし金本位の国では「銀値」は通じない。日本での「金融」とは「金銭融通」の意味にとつており、中国古来の「泉幣」貨幣のこゝとの意と解してよい（第六号）と述べている。

〔民権と人權〕中国では「民権」論が盛んであるが日本では「天賦人權」が説かれているが「民権」と「人權」はどのようにならうのか、又どちらが正しい訳語であるのか（第六号）との質問に対して次のように答えている。

「民権」之説ハ実ハ盧梭ヨリ倡サレタモノニ非ラズ：……「天賦人權」トハ人人生レ而シテ固有之自由自治

ノ権利及ビ平等均一ノ権利ヲ謂フナリ。……故ニ日本訳語ヲ以テ当ト爲ス。

呼称についてのあれこれ話

中国は古来「礼教之邦」と称せられてきただけに、氏名につける接頭・接尾の敬称語が複雑多岐にわたっていた。例えば接尾詞では……

「閣下」ゴーシア」高級官僚や軍人に対する敬称

「師父」シーフ」または「師傅」シーフ」学芸、芸能、技能の師匠や棟梁、板前、親方に対する敬称

「先生」シエンション」学生の側からいう先生や医者など特技能力のある人、商店の会計を司る人、さらには一般に用いられる敬称

「老父子」ラオフーズ」老先生」ラオシエンション」昔家塾の教師に対する敬称

「老板」ラオバン」企業や商店の主人、役者や座頭に対する敬称

「老師」ラオシー」恩師および現在習っている教師に対する敬称

「公」クン」旧時、姓のあとに付した尊称。解放後でも使用されていた。例えば「周公」チョウクン」

とは周恩来総理のことであり「廖公」リャオクン」といえば廖承志先生を指していた。この呼称は訪中した際のある会合で聞いたのであるが、上司に対する尊称と同時に親近感のこもった呼称のように感じられた。

「老」ラオ」これも尊称の一つで、例えば郭沫若科学院長のことを「郭老」クオ・ラオ」といい、夏衍中日友好協会会長を「夏老」シャ・ラオ」と呼称していることである。なおこの「老」に限り姓の前に冠して親しみを表わす呼称となる。例えば学友同士や同僚間では「老王」ラオ・ワン、王くん」とか「老李」ラオ・リー、李くん」というのである。だが二字姓の場合、例えば「欧陽」オウヤン」とか「南宮」ナンクン」などという姓には「老」をつけない。つけると語呂が悪く年寄りじみてくる。だから私などは日本式にいえば、いつも呼びすてにされたのであるが、慣れてくると不思議と親しみを感じるのであった。

さて、解放後の中国では「同志」トンジー」という呼称が一番多用されているのであるが、これは戦前の解放区から始まった。つまり「延安」からであった。文芸評論家徐懋庸に延安を紹介した歌がある。

審洞安全小米香 洞穴生活は安全で粟飯もうまい

延安別有好風光 延安には他にない美しさがある

人人相見称同志 人人は互いに同志といい合つて

晚会天天大礼堂 晚餐パーティーは毎夜大講堂で

解放後、この「同志」という呼称が全国に普及されて

くると、これまでの呼称で最も多く用いられていた「先生」に異変が起つたのである。舒蕪の『名号称呼雑談』

(『隨筆』一九八四年第一期)によると……

「先生」という呼称は、正式公開の場所では「非同志」

「非共産黨員」「非マルクス主義者」を意味する。

というわけである。六〇年代の初期に行われたある学術

討論会の席上で、報告者が報告のなかで一老学者を「〇

〇先生」と呼称したところ、この老学者はいきなり憤然

として抗議し、その報告者に対し、「××先生先生」と

と「先生」を何回もくりかえして報復した、という笑い

話がある。

解放後、中国では公民はすべて同志的關係にある、と

考えられている。同志の仲間でないかつての資本家や特

赦を受けたものに対する呼称が「先生」になるにつれて、

そのイメージが変つてしまったようである。

なるほど「同志」とは「志を同じくする人、特に政治

的に立場と見解が同じである人を指す」(『新華字典』)と

か「公民相互間での一般呼称」(『現代漢語詞典』)と説明
されている。『農民詞典』になると、もっと具体的である。

わが国では人民すべてが国家の主人公であり、偉大

な社会主義国家建設のため奮闘しており、人民大衆

の相互關係は正に同志的關係にある。故に同志の二

字は、わが国人民間に普遍的な呼称となつたのであ

る。

こういうわけであるから、われわれ外国人にとって、

この「同志」という呼称は、なれなれしく使えるもので

はないのである。ところが、この「同志」を説明して：

「人の姓や職位のあとにつけて呼ぶ呼び方」(岩波辞典)、「

中国で“…さん”“…くん”の意に用いられる呼称」(大

安辞典)といっているのは、舌足らずであり、誤解を招

きかねないのである。われわれはやはり「先生」と呼ぶ

方が無難のようである。

(しばた みなる・文学部中国文学科教員)



編 集 後 記

予定より半月ほど遅れて71号を発行しました。

今号は図書館の問題として大学図書館のネットワークである学術情報システムについて取りあげました。参考資料としてあげた各種刊行物等にははるかに及ばないものでしかありませんが、運よく最先頭で活躍されているおふたりにお引き受けいただき、せめてもの救いとなっています。総合図書館完成に向けて読者の皆さんの御一考を得られればと思います。できれば図書館をめぐる他の問題やISBN等についても見ていきたいと考えています。今回はこの問題について学内の声をお聞きすることができなかつたので、できるかぎり御意見・御批判をお寄せいただきたいと思います。今後の参考にさせていただきます。

次号は11月発行、教育の問題について取りあげる予定です。投稿をお待ちしています。

(編集子)

1984年9月号 通卷71号

編集・発行 関西大学生活協同組合・組織部「書評」編集委員会

連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 (内線4821) or 387-9998)

定価 250円